

在日朝鮮人の文学—植民地時代と解放後、民族をめぐる葛藤

尹健次（ユン・コオンチャ）

キーワード：在日朝鮮人文学・在日文学・植民地文学・民族文学・民族意識

在日朝鮮人の歴史を見ると、文章を書く人、つまり「もの書き」はそう多くはなかったと言える。多い、少ない、は見方によってかなり違ってくるが、しかし在日朝鮮人にとって、解放後ながらも、大学など高等教育機関に勤める者がいなかったこと、そして文筆を業とする職業などが成立しなかったためである。その前提として、植民地時代に日本の高等教育機関で本格的に勉学をする機会が少なかったという事情がある。もっともそれでも、1920年代以降、ほんの少しではあるが、文章をものする人が出てくるが、それは新聞などジャーナリズムの世界と、いわゆる「文学」の領域においてであったと考えてよい。ただその場合でも、そうしたもの書きは、清らかな孤独に身を浸して、言葉を綴ればいいというわけではなかった。そこには抑圧され支配される枠組みから自由ではない孤独があった。孤独はある意味で人を自由にするが、同時にそれは、人を底知れぬ不安に突き落とす。それを救うのが「文学」であるかも知れない。

その意味では、在日朝鮮人の文学というものを考えてみるなら、それは一人ひとりの個人のものというよりは、歴史に規定された集合的なものであろう。一般的にいうなら、ひとは、抑圧され支配される時、それを解き放とうとして、文学に活路を求める。それを民族意識にもとづく民族文学の展開と言っていいのかもしれないが、ここでの「民族」は多様な意味をもったものである。ことば本来の民族でもあるし、あるいは民衆でもあり、底辺とか、周辺と言いうるものであるかも知れないし、ときには強者・多数派に参入しあるいは包摂された形のものであるかも知れない。しかもそこで用いられる言語は、必ずしも抑圧され支配される植民地側の言語とは限らず、むしろ宗主国の言語が主たるものともなる。

民族といえば、国家という言葉が連想されるが、植民地とされた朝鮮の場合には、故郷とか、故国、祖国という言葉にもなる。その大きな枠組みに押し込められた個、一人ひとりの人間が文章を書くという場合、それは意識するとしないとにかかわらず、大きな物語と小さな物語を同時に視野に収めることになり、また「自由」とか「変革」「解放」といったものをテーマにするか、逆にそれを歪んだ形で隠蔽することにもなる。歴史、共同体、日常の営み、知覚、思想、イデオロギー、葛藤、欲望、自然といった全体を描くいわゆる「全体小説」になるかどうかは別にして、少なくともどのような形であっても、時代状況と格闘する自己の表現が課題となるはずである。当然、朝鮮人と日本人そして混血の問題だけでなく、家族や因習、伝統といったもの、さらには必然的に男と女の関係、恋愛・性愛の物語が重要な要素ともなる。朝鮮語でいう「民族主義」は、日本語のナショナリズムという言葉に重なるものであるが、それは好むと好まざるとにかかわらず、植民地近代性の性格を帯びたもので、しかも本来的には、脱植民地化の課題と密接に絡むものとしてある。

ただここで念のためにいうなら、ひとはつねに偶然にこの世に産み落とされるものであり、それが人

類の歴史でもある。朝鮮人は朝鮮人として産み落とされるのではなく、生まれたのち、朝鮮人になっていくのである。その意味では、敢えていうなら、民族とか、民族意識、民族主義といったものも「後天的」なものであり、その後天的なもの、歴史意識、政治意識、伝統意識、文化意識といったものは、家庭や郷土、社会、さらには国家（権力）に根ざした「教育」によって形成されると考えてよい。しかも「教育」というものは一般的には支配的な権力や共同体を背景にするマジョリティの形成を目的とするもので、その限りにおいて、そこで形成された主体は民族や国家ないしは共同体に関わる自らの存在に普通は疑問をもたないように仕向けられる。しかし朝鮮が日本によって植民地化されるという歴史の局面においては、朝鮮人はたんに朝鮮人に形成されるというわけにはいかなくなり、そこに権力性を帯びた「日本」が入り込んでくる。つまり矛盾、対立、抵抗、従属といった植民地被支配にからむ様相が現出し、朝鮮人は植民的「主体」として形成されざるをえなくなり、朝鮮と日本のあいだで揺れ動く自己の分裂ないし葛藤に直面することになる。

近代文学の始まり、そして張赫宙

朝鮮の近代文学はこうして植民的文学として形成されていくが、その内実はいま述べた自己の分裂ないし葛藤、そしてそこから脱しようとするものがきとといったものの描写が中心になると言っているはずである。ちなみに「朝鮮近代文学の始祖」ともされる李光洙は1892年3月生まれであり、日本に留学して第一作「愛か」を日本語（国語）で書いたのは1909年である⁽¹⁾。西欧を受容した明治日本の小説に学び、しかも民族主義的な立場ながら儒教思想と因習を批判する啓蒙主義的な小説を書こうとする李光洙であるが、「愛か」は、朝鮮人留学生としての実存と同級生の美貌の少年に魅せられた内面の葛藤に耐えきれずに、最後は鉄道自殺を凶ろうとする短篇である。

任展慧の労作『日本における朝鮮人の文学の歴史』（法政大学出版会、1994年）によれば、もう少しさかのぼって、近代の日本における朝鮮人の文学活動は、聖書の朝鮮語訳を出版した李樹廷に始まり、その後留学生たちが主になって『親睦會會報』（1896年-1898年）『學之光』（1914年-1930年）などで、朝鮮語による文学活動をおこなったという。朝鮮人が日本語による創作をするのは1920年代に日本のプロレタリア文学運動が活発になりだした頃からで、朝鮮人の渡日が増え、朝鮮人に関わる労働争議が頻発していくなかでのことであった。日本における朝鮮人の文学活動のうち、日本語による作品数が朝鮮語による作品数を凌駕するのは、1920年代後半のことであるという。金熙明の「異邦哀愁」（『文芸戦線』1926年3月）は、日本における朝鮮人の生活をうたった最初の詩人のものである。／木賃宿住宅、住居の朝鮮人の子供／父親が稼ぎに出ると獨りぼち／……／母親もなく、友達もなく／玩具もない部屋は眞暗闇だ／……。

やがてそうしたプロレタリア文学の運動が解体し始めた頃に張赫宙（本名・張恩重）が『餓鬼道』（『改造』1932年4月、懸賞当選作）で日本の文壇に登場し、ついで金史良（本名・金時昌）が『光の中に』（『文芸首都』1939年10月号）で登場して、芥川賞候補となる。ともに日本語で書かれた小説であるが、時期的には、植民地朝鮮で「国語」教育が始まって約20年、ひとが生まれて成人に達する年月をへた頃である。

金史良は張赫宙より7年遅れて日本文壇に登場したことになるが、張赫宙は間もなく皇民化運動に加担して「親日派」の汚名を着ることになり、一方、金史良は支配権力にあらがいつつ、抵抗文学者としての道を歩んでいくことになる。一般的には張赫宙・金史良の両者が在日朝鮮人文学の始まりないしはその前史として位置づけられるようであるが、朝鮮の詩心を流麗な日本語に翻訳し、北原白秋に認められて世に出た金素雲（『朝鮮民謡集』泰文館・1929年、『朝鮮童謡選』岩波文庫・1933年、『朝鮮民謡選』岩波文庫・1933年など）や、金史良と同じ1939年に小説『ながれ』で芥川賞候補となった李殷直も見

逃すことのできない文学者である。

ただここで注意を要するのは、在日朝鮮人の文学を研究している磯貝治良が、植民地時代末期、解放後1950年代までは、日本語で表現された在日朝鮮人の文学は、とくに「在日朝鮮人文学」と呼びならわせることはなかったようである、と言っていることである。この時点で、個々の作家は、一人ひとりが志向的には母国語や祖国（くに）と地続きでつながっており、自己表出や生活の場としての〈在日〉はいまだ確定された概念をもちえずに、仮の時間と空間にすぎなかった、というのである。在日朝鮮人文学といえば、誰よりも金達寿や許南麒といった名前を思い起こすが、植民地時代末期そして1950年代までの金達寿の小説や、許南麒の詩は「日本語で書かれた朝鮮人の文学」であって、範疇化された「在日朝鮮人文学」ではないという。別の言葉でいえば、「在日朝鮮人文学」という範疇の誕生は、在日朝鮮人の社会が、仮の時間・空間としてではなく、現実的にも理想的にも世代的にも形成された事実と関係し、それは現象面でみれば、1960年代に入ってからのことであるという⁽²⁾。

このことと関連するというなら、これまで何度も、在日朝鮮人文学は朝鮮文学なのか、あるいは日本文学に属するのか、といった類の議論が繰り返されてきたが、私自身はそうした議論には、あまり関心はない。一世であれ、二世であれ、あるいは三世であれ、朝鮮半島にルーツをもつ在日が自らのアイデンティティと生きざまを小説や詩にすると、それは在日朝鮮人文学ないしは〈在日〉文学と呼ばれるものである、といった程度に考えればいいのではと思っている。

さて、文学研究者の鄭百秀は、『コロニアリズムの超克』（草風館、2007年）で、近代朝鮮の文学を支配と被支配の屈折、脱植民地化の問題と関連して述べている。そこで鄭百秀は、朝鮮近代の文学、とりわけ植民地的文学は、1930年代半ば以降、いわゆる朝鮮文化否定の「内鮮一体」期に形成された旨のことを示唆している。1931年の「満州事変」以降、日本の中国侵略が激化していく1930年代後半以降、それまでの「内鮮融和」政策は「内鮮一体」政策に置き換えられ、朝鮮民族の精神文化や独自の価値を朝鮮人自らが放棄することが要求され、それは朝鮮語の廃止、創氏改名、神社参拝、徴兵制実施などの政策として具体化されていった。「内鮮融和」がそれでも朝鮮民族特有の精神文化や独自の歴史的価値を許容する余地をもっていたのに対し、「内鮮一体」は朝鮮民族の言語と伝統文化を抹殺し、植民地住民の皇国臣民への従属を強要するものであったという。

ということは、この時期に確立されていった朝鮮人の植民地的文学は、何よりもこうした時代状況にどう向きあうかが第一の課題となった。朝鮮の近代文学を開拓したという李光洙は、1922年5月に「民族改造論」（『開闢』）を発表して朝鮮民族の〈劣等性〉を強調してその「改造」を訴える。ついで1941年には『内鮮一体随想録』（中央協和会）で、朝鮮民族の民族性を全否定するまでになる。「内鮮一体とは朝鮮人の皇民化をいふのであって双方歩み寄ることを意味するのではない」、「内鮮一体は……上御一人の大御心」と。ここで李光洙は、「内鮮一体」の論理に完全に取り込まれ、以後、「親日派」の汚名を一身に背負っていくことはよく知られている。

しかし実際には、歴史の事実はそう簡単ではない。朝鮮人がそう簡単に日本に屈服し、皇民化されたわけではなく、朝鮮語を捨てて日本語にさっと乗り換えていったわけでもない。文学でも、朝鮮人か日本人か、朝鮮語か日本語か、といった二分法的・対立的な思考で済んだわけではなく、むしろそのこと自体が苦悩のタネとなり、少なからず文学をする者の焦眉の課題となったといえる。張赫宙や金史良に即していえば、張赫宙そして金史良が、朝鮮人と日本人をどう描き、あるいは朝鮮人と日本人の境界・交錯をどう扱おうとしたのか、しかも朝鮮語と日本語の問題をどう了解しようとしたかの話になる。それはまさに、のちの「在日朝鮮人文学」につながる根幹の問題であり、また私の「在日の精神史」叙述のひとつの軸になるものである。

張赫宙や金史良が植民地時代に活躍した1930年代末期に、日本で「朝鮮文学ブーム」というのが起こる。解放後東京都立朝鮮人学校の日本人教師となり、学校の朝鮮語講習会で朝鮮語を学びはじめ、詩

人の許南麒や作家の李殷直から朝鮮文学の話聞き、朝鮮語・朝鮮文学の道にのめり込んでいった梶井陟によれば、もともこのブームは、日本の中国侵略の深まり、朝鮮半島の軍事的地位向上と表裏一体のものであった。当時、日本文学者は誰一人として朝鮮の文学作品の選択や翻訳に関わったことはなく、ただ日本での朝鮮文学の紹介は、朝鮮人文学者による選択・翻訳に一方向的に依存したものである。つまり日本文学者が朝鮮文学にたいするとき、「異民族の文学に向い合おうという姿はどこにも見られない」というのである。実際、『文学界』の座談会「朝鮮文学の将来」（『文学界』1939年1月号）では、出席した秋田両雀、林房雄、村山知義らは異口同音に、朝鮮人文学者は「内地語（日本語）」で作品を書くべきだと主張している。「内地語で書いた方が広く読まれることになるから、内地語の方がよいですね」（秋田両雀）、「作品は総べて内地語でやって貰いたい」（林房雄）といったように。梶井は、これは日本語の世界に朝鮮人を強引にひきずり込んで、「朝鮮文学の放棄」を強要していったもの、という⁽³⁾。

ここには、日本人と日本語という「日本文学」の安全地帯に安住していることにいささかの疑問もたない日本文学者たちの牢固とした意識構造がある。いわば日本文壇全体が朝鮮の文学者に日本語による創作を迫ったことになるが、それにたいし張赫宙は、すぐさま「朝鮮の知識人に訴ふ」（『文芸』1939年2月号）を発表して、朝鮮の文学者、知識人に自らの所見を明らかにする。すなわち朝鮮民族は落ち着きがないとか、激情性、嫉妬心、ひねくれなどの民族的欠陥をもっているが、それは内地人の朝鮮移住とともに発生した新たな植民地心理といったものに関わる。南朝鮮総督は「内鮮一体」を提唱しているが、我々がもし内地化していけば、自然落ち着きのある、ひねくれのない民族となるのは可能ではないのか。アイルランドは300年かけて英語化したのが、我々は100年で足りるのではないか。日本語は今後ますます東洋の国際語になろう。内地語を学び、使うことは必ずしも排撃することではない、と。

これは長らく、張赫宙が親日的態度を明確にした最初のものとしてされてきたが、しかし民族の運命に確信を持ち得ないでいた張赫宙は、すでに1935年頃から、ひとりの「朝鮮人作家」と冠せられるのではなく、日本語で書く作家として日本文壇の中で地位を確立したい、そしてなんとか生活を安定させたいと望んでいたともされる⁽⁴⁾。1936年12月には植民地朝鮮の雑誌『三千里』（第8巻第12号、朝鮮語）に、帝国日本の文化資本の中心地・東京においても大衆的スターになっていた舞踊家・崔承喜との対談「芸術家の双曲奏、文士張赫宙と舞踊家崔承喜女史、場所東京にて」が所載されている⁽⁵⁾。人脈的にいえば、張赫宙はその前、『餓鬼道』入選を祝う招宴で日本文学者の保高德蔵と会い、ついで湯浅克衛、田村泰次郎らと知りあい、保高德蔵主宰の『文芸首都』の同人になる。1937年夏には日本人の野口はな子と同居生活を始めている。

「朝鮮の知識人に訴ふ」が出るやそれに対する批判が起こる。李明孝は「朝鮮の知識人として答ふ」（『文芸』1939年3月号）を書いて反駁し、朝鮮語か、日本語か、という緊迫した雰囲気醸し出される。しかし、日本の大陸侵略を軸とする政治状況はしだいに朝鮮人文学者の「民族精神」を押し込めていき、張赫宙はその「時流」に乗ることによって、植民地時代末期、日本内地でもっとも著名な朝鮮文化人の位置を占めていくようになる。

張赫宙についてはこれまで多くの論究がなされてきた。任展慧「張赫宙論」（『文学』岩波書店、第33号、1965年11月）がもっとも初期のもので、代表的なものであるが、比較的最近のものでは兪淑子「張赫宙の文学行路」（『翰林日本学研究所』第5集、翰林大学校日本学研究所、2000年12月）も参考になる。任展慧は在日朝鮮女性の文学研究者で、こつこつと学び、成果を順次発表していく姿勢には共感を覚える。ただし、その論述はきわめて厳しいものである。張赫宙論についていえば、『餓鬼道』など初期の作品のほとんどは、朝鮮民族の痛苦、とりわけ虐げられている農民の姿を直視するところから生まれている、と肯定的に評価している。しかしやがて日本文壇の趨勢を身を感じた張赫宙は、「個人の生存欲に基く各種の本能」を描くことの方が「より高度な」芸術世界であるという見解を表明し、「暗

中模索」のすえ、『憂愁人生』（『日本評論』1937年10月号）などで、「日本人化の道」に向かっていくと、かなり批判的に評価する。この『憂愁人生』の主人公は朝鮮人を父に、日本人を母にもつ混血児で、小学校に入学した時から「朝鮮人」とののしられる。父はトラブルを起こして投獄され、母は妹を背負ったまま入水自殺する。張赫宙はこの小説ではじめて在日朝鮮人を登場させるが、父は自分の妻が日本人（「内地人」）であることを唯一の自慢にしていた、と描く。そういえば、さきほど記したように、この作品を発表すると、張赫宙自身、日本人女性と同居生活を始めるのは、時期的にはほぼ一致している。

任展慧は、日本帝国主義イデオログたちによって操作された朝鮮人蔑視政策は、張赫宙自身にはね返り、張赫宙の民族的コンプレックスはいっそう強められていったという。それが「内鮮一体」の賛同につながり、やがて張赫宙の私的な立場をこえて、軍国主義イデオログたちの代弁者の立場に移行していく。「皇民化」の問題を正面から描いた『岩本志願兵』（著者名・野村稔、『毎日新聞』連載、1943.8.24.-9.9.）は、朝鮮での徴兵制実施と関連して、張赫宙が朝鮮人志願兵訓練所に体験入所したことをもとに書き上げた短篇である。複雑な家庭に育った朝鮮人青年「岩本」が皇民として生まれ変わる決意をかためるという筋書きであるが、任展慧は朝鮮の若者を戦争にかりたて、死地においやるものだといって弾劾する。「在日朝鮮人文学者の戦争責任の追及は、まず、張赫宙から始められねばならない」とまで。

私が『岩本志願兵』を読んだかぎりでは、『餓鬼道』と同じく、文学作品としてやや生硬な日本語表現が感じられはするが、当時にあっては、小説の素材の奇異さ、内容の緊迫性がかえって日本の文壇に受け入れられたのではないかと思われる。もっとも、張赫宙が日本語で小説を書くためにどんなに苦勞したのか、について少し述べると、さきにあげた保高德蔵が日本敗戦後の1946年7月刊『民主朝鮮』（第4号）で次のように語っている。

「日本語をマスターするために、万葉集、源氏物語等の古典から講談、落語まで研究するほか、話ながら行く日本人の後を尾けて会話の勉強に耳を澄して三丁も四丁もの道をどれほど歩いたか知れない」（『日本で活躍した二人の作家』）と。同じく『民主朝鮮』第4号では、石塚友二が「交友関係から」と題して、張赫宙の日本語学習についてもう少し詳しく述べている。「張赫宙氏の日本語は、初めて会ったときに既に朝鮮の人とは感じられぬほど流暢なものだった……。日本語を正しく発音出来るために、大邱の街を歩いて行く二人連以上の日本人を目にする度毎、ひそかにその後をつけて息を殺しながら一心に会話に耳を傾けて何処までもついて行く、……。それが何年にも亘ってなされたのである。濁音か半濁音にならないためには、耳の訓練と共に、発声の試練が必要であった。……」と。もちろん、植民地時代末期、日本語で書いた金素雲、張赫宙、金史良などが日本語の習得にどれほど苦勞したかは想像がつきそうでもある。金素雲は東京に出て、納豆売り、新聞配達などで働き、夜学で学び、図書館で東西の文学書を読みあさったという。

しかし本質的に考えれば、朝鮮人作家にとっては、宗主国日本の言語は、所詮支配者の言葉であったはずである。いわば「国語」という名の日本語は、朝鮮人からすれば、貧しさ、狭小さ、陰湿さをもった統治の論理であり、支配の道具であった。日本語を使うということは必然的に日本人の生活感情に取り込まれていき、日本の社会意識や権力の意図に慣らされていくことになる。それでもなお、日本語を使おうとするなら、その日本語は抗いながら使うしかない。それが日本で暮らす朝鮮人もの書きの宿命であると言ってよい。その点、張赫宙は日本語を現実的かつ出世欲の手段として捉えすぎたのではないかと思われる。実際にも、張赫宙が文学をする確固とした思想やイデオロギーをもっていたとは考えにくく、その分、時代の推移にながされて、自民族の欠陥をあげつらうとともに、日本の支配政策に迎合していくことになったのではないのか。

ただそれでも、張赫宙は日本敗戦／朝鮮解放の時点では、なお今後進むべき自分の道について揺れ動いていたのではないかと思うこともある。それは張赫宙自身の問題であると同時に、それにどう対処す

るのか、どう受け入れるのかという、植民地体験をもった朝鮮人の問題ではなかったかと思う。もっとも、そうはいっても、朝鮮のもの書き、朝鮮知識人の思想性が第一の問題であることに変わりはない。一国史あるいは大東亜共栄圏史を乗り越えなければならないといった今日の歴史研究、そして思想史研究の課題意識からすれば狭く閉じ込められたものであるかも知れないが、在日朝鮮人を論じるに際しては、やはり朝鮮民族と日本の関係を不可避とし、しかもその枠内で朝鮮民族の内部構造をどう捉えるのかという問題も含めて、どう生きるか、どう生きたかを考えることが必要であるのではと思う。それは端的に言って、やはり民族問題・植民地問題であると言ってよいのであろう。

金史良と民族的主体性

さて、さきほど引用した保高德蔵は「日本で活躍した二人の作家」で、もう一人の作家・金史良についても述べている。金史良の場合には、その日本語習得や能力のことではなく、もっぱらその思想性の高さについて論じている。保高は張赫宙の紹介で金史良と交友するが、最初28歳だったという金史良は、年齢のことなど念頭に浮かばないほど、すでに智能や感情の点で大人の世界にいたという。「彼は単なる芸術至上主義者ではなかった。彼の心中には常に茫々たる朝鮮民族の独立といふ火が燃え盛ってゐたことが、はっきりと私には分る。……総督府の官憲に阿諛する作家を揶揄した「天馬」や、色衣政策を諷刺した「草探し」等の痛烈な作品を発表して、朝鮮総督府のブラック・リストにあげられ、……鎌倉署に約三ヶ月あげられたのに、中心思想に何等の動揺を示さなかったことを見ても頷ける」と。

金史良は平壤屈指の富裕層の出身で、兄はのちに朝鮮人としては最初の朝鮮総督府専売局長に就任している。1935年に東京帝国大学文学部に進学してドイツ文学を専攻する。卒業後同人誌『文芸首都』に参加して『光の中に』を発表し、ついで「土城廊」「天馬」「草探し」などを相次いで発表して、一年足らずの間に日本における民族主義作家としての地歩を固める。作家活動を始めていた金達寿にもこの頃会うが、金史良は一日8時間は必ず机に向かって原稿を書いていたという⁽⁶⁾。しかし間もなく、1941年12月8日、真珠湾攻撃が行われるや、金史良はその翌日未明、思想犯予防拘禁法により鎌倉警察署に拘禁される。やがて釈放されるが、わずか2年間の日本での創作活動に見切りをつけ、1942年2月に平壤に帰郷する。内心では統治権力に対する憤まんをつのらせていくが、「御時世」のために海軍見学団の一員として各地の海軍施設に派遣され、やがてルポルタージュ「海軍行」(朝鮮語)を『毎日新報』(1943年10月)に連載することになる。朝鮮語で国策便乗の親日的な文章を書いたわけであるが、結果的にはそのために強い挫折感を味わい、1944年に入ると創作活動を中止する。1945年2月、金史良は「在支朝鮮出身学徒兵慰問団」の一員として北京に派遣され、その帰途、劇的ともいえるほどに八路軍抗日地区へ脱出し、やがてそこで解放を迎える。

金史良についてはこれまで多くの論述や著作がある。なかでも安宇植は1972年に岩波新書で『金史良—その抵抗の生涯』を出したが、それは1970年11月以降雑誌『文学』に連載したものを一冊にまとめたものである。1983年にはそれを『評伝 金史良』と書き改めて、草風館から出している。さきにあげた鄭百秀の『コロニアリズムの超克』では、かなりの部分が金史良作品の分析にあてられている。先行研究の多くは、金史良を民族的主体性を堅持した作家として肯定的に評価するものである。張赫宙が個人の体験に根ざしつつも、そこに利己的な欲望をからませて親日的方向にのめり込み、結果として民族の運命全体をないがしろにしていったとするなら、金史良は自らの体験にもとづきながら、それを「民族」の問題に昇華させて作品化している。つまり金史良は自分の体験を生かして作品を書くが、一時ぶれることがあるように見えても、基本的には自分の体験のもつ意味をよく知りつつ、民族全体のレベルで考察しようとした、ということができる。

安宇植の言葉を借りれば、「金史良の生活描写の実体は、あくまでも朝鮮の下層社会における生活の

実態と、下層庶民と反抗者、さらには植民地統治下にある現実社会からも受け容れられずに疎外された下層大衆の意識構造を的確にとらえ、これを反映したところにあった」（『評伝 金史良』）ということになる。そういえば、金史良は『光の中に』のあと、在日朝鮮人を題材とした「無窮一家」や「親方コブセ」を書いているが、それらもやはり同じ観点に立つものと考えてよい。しかもそこで金史良は、植民地朝鮮と宗主国日本を分裂的・二項対立的に位置づけるのではなく、最下層の閉ざされた生活を強いられる日本内地の朝鮮人と故郷・朝鮮との紐帯、そして明日への希望・解放を語ろうとしている。それは朝鮮への「情愛」と「悲嘆」、日本への「憧憬」と「憎悪」を同時に内面奥深くに沈潜させつつ、朝鮮の民族的な情緒や風情、雰囲気といったものを内地語の日本語でどう表現できるかという、ぎりぎりの模索ではなかったかと思われる。

ここで少し付け加えておくと、近年、朝鮮の近代文学を論じるにさいして、植民地朝鮮と宗主国日本を分裂的・二項対立的に位置づけるのではなく、個別の作家の言動や作品分析に寄りかかろうとする傾向が強まっているように思う。それはそれで重要なことではあるが、ただそうした傾向が逆に、朝鮮語／日本語、抵抗／親日の全体的把握を曖昧にしてしまうのではないかと危惧する。白でもない黒でもないといったグレーゾーンを探求することは重要であるが、それが歴史の全体構造、端的にいうと民族問題・植民地問題を軽視することにつながっているのではと心配する。

それはともかくとして、金史良の代表作『光の中に』についていうなら、無産市民の救済・生活向上を目的とする学生セツルメントで教師をつとめる「私」は、暴力的な日本人を父とし、料理屋から身請けされた従順な朝鮮人を母とする小学生「山田春雄」を知るが、いじけていた「春雄」は間もなく「私」が「南（みなみ—日本語発音）先生」ではなく「南（なん—朝鮮語発音）先生」であることを知って、少しずつ心を開いていく。「春雄」の父と母は、日本と朝鮮半島の対称化であり、「春雄」は双方の陰影の重なりである。子どもは、本来、母（朝鮮の地）の温もりのなかで育つ。作品は、内鮮結婚の矛盾を描き、「光」としての子どもの成長に未来を託し、現実の「闇」に対する責任に立ち返る⁽⁷⁾。金史良の思想からすると、日本人と朝鮮人の「混血」である「春雄」は間違いなく、朝鮮民族の内部に抱擁すべきものとして位置づけられている。それは芥川賞候補に推薦した日本の文学者たちが、「混血」を日本人の外部に暗黙のうちに突き放したのとは明確に異なる。もっとも、この作品自体は、抑圧された在日朝鮮人、さらには朝鮮民族の行くべき道、問題解決の方向を指し示しているわけではないが、しかし金史良の文学的観点、思想のあり方を明瞭に示すものとなっている。

たださきほども書いたように、金史良が一貫して民族的主体性を堅持しえたのかどうか、ということになると、その歴史的評価は厳しいものとならざるを得ないのかも知れない。朝鮮近代文学の研究者である大村益夫によれば、植民地時代の朝鮮人文学者の生き方は、抵抗か親日かという二者択一をせまる単眼のみでは捉えられない複雑な様相を呈していると、金史良とて例外ではなかったはずであると述べている。「その作品は民族的抵抗意識を秘めながら、流麗な叙情性をもって市井の人々の哀歓をうたいあげている」と述べながらも、である⁽⁸⁾。金史良が「海軍行」など、強要されたとはいえ親日的な文章を書いたことはすでに述べたが、それでは時代の流れのなかで、金史良の文学表現はどんな変化をとげていったのか。

任展慧は「金史良「山の神々」完成までのプロセス」⁽⁹⁾という面白い論文を書いている。『〈在日〉文学全集 第11巻 金史良・張赫宙・高史明』の金史良・年譜を参照しつつ読むと、金史良は最初エッセイ「山の神々」を『文芸首都』1941年7月号に書き、それを第二小説集『故郷』（京都・甲鳥書林、1942年4月）に小説「山の神々」として収録している。ところが任展慧は、偶然にも古書店で見つけた月刊誌『日本の風俗』1941年10月号（春陽堂書店）に金史良「神々の宴」が発表されているのを知る。読み比べてみると、この小説「神々の宴」はエッセイ「山の神々」と小説「山の神々」の中間に位置する作品で、最初の文章が順次改作されて一つの作品に完成されるまでの過程をたどることができる

のを発見する。つまりはエッセイ「山の神々」から小説「神々の宴」、そして小説「山の神々」に至る変化の様子をよくうかがうことができるという。

最初のエッセイ「山の神々」は平安南道陽徳温泉に行ったときの見聞にもとづいて朝鮮習俗を織り込みながら書いたものであるが、金史良が朝鮮人作家たらんと欲したはずの重要な部分が削除・改文されていくという。エッセイ「山の神々」では「朝鮮人の誰もがかういふ忍耐の精神を生活の上にも生かすことが出来たら大したものであらう。……、それも僕だって忍耐力の強い朝鮮人の一人になりたいといふ自覚があるからである」という部分が、「神々の宴」では「……、とはいへ私も忍耐強い立派な国民の一人にならうといふ念願」と書き改められ、さらに小説「山の神々」ではたんに「しかし私も忍耐強い立派な国民にならうといふ意味」となっているという。当然検閲への配慮のためであったろうが、任展慧はこうしてひとつの作品がたどった過程を明らかにしながら、真珠湾攻撃をはさんで急テンポで暗さを増していった当時の状況を念頭におけば、エッセイのなかでの「朝鮮人」という言葉を「国民」に変更せざるをえなかったことは容易に想像することができよう、と述べている。

この任展慧の叙述は金史良が困難な時代にあっても、ともかくも民族的主体性を堅持していたことを主張するものであろうが、『光の中に』がああ「内鮮一体」政策、とくに「創氏改名」政策が強行されていくさなかに書かれたことを想起してみるのもいい。創氏改名政策は1939年11月に政令が發布され、翌1940年2月に実施され、朝鮮の知識人・民衆に大きな波紋を及ぼしていく。『光の中に』が『文芸首都』に掲載されたのは1939年10月であるが、その少し前、金史良は朝鮮日報の学芸記者として一時的に京城に滞在していたために、創氏改名政策の実施についてはその準備過程からすでに知っていたと思われる。一方、総督府は、創氏改名政策の実施にあたっては李光洙ら「親日的」文学者を最大限利用しようとした。

そうしたなかで登場した『光の中に』は、「私」が南（みなみ）から南（なん）へ回帰する筋の展開で、当然、創氏改名とは明確に対立するものであった。文学研究者の南富鎮は、この問題を『近代文学の〈朝鮮〉体験』（勉誠出版、2001年）で「創氏改名の時代—金史良論」と題して一章を設けて論述しているが、『光の中に』で扱われた混血児の問題は、日帝植民地下の朝鮮民族問題の核心からは離れたものだと批判されることもあると述べつつ、しかし、創氏改名政策のなかにあった金史良文学は、基本的にはそれに対する強烈な批判で一貫していたと主張している。「光冥」（『文学界』1941年2月号）では、内鮮結婚の矛盾と「内地」での朝鮮人差別の問題が浮き彫りにされつつ、そうした差別と深く関わるものとして朝鮮人の名前の問題が扱われている。また日本での最後の作品である「親方コブセ」（『新潮』1942年1月号）では、登場する朝鮮人労働者がいずれも、韓原、崔本、朴沢、馬川、玉村、金海など、奇怪な日本名を名乗っていることから、金史良が創氏改名政策、さらには日本の朝鮮支配政策に対していかに抵抗的であったかが分かるという。

さて、敗戦／解放後、引き続いて日本で活躍した朝鮮人作家には李殷直、金達寿、がいる。ともに貧窮のなかにある在日朝鮮人の現実と内面を日本語で文学的作品として描写しようとした。李殷直の場合、さきに述べたようにすでに小説『ながれ』で世に出ていたが、日本大学専門部芸術科在学中、特高警察によってひどい拷問を受ける。卒業後、日本学芸通信社編集部で働き、やがて時局の悪化とともに厚生省中央興生会新聞局で仕事をする事になり、厚生省主事の肩書で九州の炭鉱で暴動を起こした同胞労働者の説得に当たりもする⁽¹⁰⁾。金達寿は李殷直と同じく日本大学芸術科に学び、その『芸術科』1940年8月号に最初の小説『位置』をペンネーム・大澤達雄で発表している。題名どおり、朝鮮人の大学生と同じ下宿の日本人学生との位置関係をテーマにしたものである。その金達寿は1942年1月から神奈川新聞社で一時仕事をするが、1943年5月から1944年2月にかけて朝鮮で暮らし、総督府機関紙の京城日報社で働き、金史良ともめぐりあっている。李殷直にしろ、金達寿にしろ、植民地時代、抵抗か親日かという命題から自由ではなかったのである。念のためにいうなら、李殷直や金達寿、それに同

じく作家となる張斗植らが植民地時代に東京で私立大学に通ったというのは本科生ではなく、3年制の専門部であった。小学校さえ満身に卒業できなかった朝鮮の青年にとっては、正規の学部（本科生）に入る入学資格がなかった。

ここで抵抗か親日か、ということは、朝鮮語で書くか、日本語で書くか、ということとどう関わり合うのか、という問題がある。忘れてならないのは、間島出身の尹東柱が立教大学ついで同志社大学に在学しながら、密かに朝鮮語で詩を書いていたことである。京城の延禧専門学校に通っていた尹東柱は、留学の必要から日本式の名前を学校に出し、卒業証明書、成績証明書、渡航証明書を準備するが、これはあくまで当時の「創氏改名」政策に従っただけのことであろうと思われる。

いずれにしろ、尹東柱は1943年7月、「治安維持法違反」で京都・下鴨警察署の特高に逮捕される。懲役二年の判決確定後福岡刑務所に移送され、日本敗戦6か月前の1945年2月に獄死する。民族的抵抗の精神を取めたその抒情詩集『空と風と星と詩』は解放後の1948年によく韓国で出版され、のちに日本語訳が刊行される。尹東柱の詩集を読むとき、私たちは少なくとも、尹東柱は朝鮮語で詩を綴った抵抗詩人・民族詩人であることを自明のようにしている。しかし張赫宙や金史良はまた別の時代を生きた。金史良は張赫宙が日本語による表現を重視した「朝鮮の知識人に訴ふ」について1940年に書いた「朝鮮文化通信」⁽¹¹⁾で、「その内容は些か主我的、露悪的であったとは云へ、寧ろそれはわれわれの反省再考すべき点を強調する所にあつたが、その反響は正しく逆な方向に現はれたのだった」と一部擁護する姿勢を示している。

金史良は「朝鮮文化通信」でまたこう書いている。「文学といふものは、やはり民衆の中に流れ込み、それに依って読まれることを絶対的に必要とする……。本質的な意味から考へてみれば、やはり朝鮮文学は朝鮮の作家が朝鮮語でもって書くことに依り、始めて成立すべきことは明らかである。……内地語で書かうとする時には、作品はどうしても日本的な感情や感覚に禍されようとする。感覚や感情や内容は言葉と結び付いて始めて胸の中に浮んで来る。……だから張赫宙氏や私など、その他多くの内地語で書かうとする人々は、作者が意識して居るとるないとに拘はらず、日本的な感覚や感情への移行に押し負かされさうな危険を感じる」と。言いかえるなら、金史良の文学は苛酷な状況においてリアリズムを追求するものであったが、にもかかわらずというか、当然というべきか、金史良の内部には感傷的・朝鮮的なものが位置づいていた。

金史良は1年に2、3回、日本と朝鮮を往き来していたが、「故郷を想ふ」(『知性』1941年5月号)というエッセイを書いている。「故郷はそれ程までにいいものだらうかと、時々不思議になることがある。……故郷に帰りたいといふ思ひは、ひとへに母や姉や妹、それから親族の人々に会いたいといふ気持からだけではない。やはり私は自分を育ててくれた朝鮮が一等好きであり、そして憂鬱さうでありながら仲々にユーモラスで心のびやかな朝鮮の人達が好きでたまらないのだ」⁽¹²⁾と。作家の金石範は「金史良について」(『文学』1972年2月号)という文章を書いているが、そうした金史良の文学者としてのあり方をうまく表現している。「その日本語とする虚構の世界にも拘らずそこにまぎれもない朝鮮的な生活感情や感覚を浸透させて作品の思想を内側から支えていることは十全に留意されるべきであろう。単に民族的な立場での抵抗思想が強かったというだけではなく、そこには彼自らのいう「朝鮮人の感覚や感情」が根ざしていたのだった。……そしてその中で金史良はその自らの日本語に目的意識性を与え、つまりそれを「朝鮮を訴える」ための手段視する立場に立ちながら日本語で書いたのだ。少なくとも当時の金史良には、現在の在日朝鮮人作家とはちがって日本語を手段視するだけの内的条件をそなえていたといえる」と。

さきに書いたように、植民地時代の「日本語で書かれた朝鮮人の文学」が1960年代に入って「在日朝鮮人文学」に範疇化されていくというなら、その連続性を支えるのはやはり「民族」＝「朝鮮人」であり、朝鮮語で書くか、日本語で書くか、朝鮮文学か日本文学か、といったことは根本的な問題ではな

いように思う。しかもここで、「民族」とは何か、ということをもう一度問いただしてみると、それは第一義的には「血統」の継承性ではあろうが、ただすべてだとは言わないまでも、「血統」そのものはかなりの程度虚構性に満ちたものである。つまり「民族」という言葉そのものが、しばしば論点未分化なままに、「血統」にまつわる集合性の表象として使われがちであったのではないかと行ってよい。それはベネディクト・アンダーソンが指摘した「想像の共同体」を見出す機能を担うものでもあった。実際にも、抵抗か親日かは、血統によって決まるものではない。そうしたことを全体的に考えると、故郷への情愛とか生活の中で身につけた感覚や感情、時代が強要する緊張感というか歴史意識、戸籍などの法的規定、あるいはまた現実の自己分裂ないしは自己矛盾の自覚、そしてそれらすべてに抗おうとする「抵抗」の精神、思想こそが「朝鮮人」の「文学」の内実をなすのではなかろうか。別の言葉でいえば、問題の根幹は植民地朝鮮に出自をもつ（朝鮮人）作家がいかん抵抗の思想を表現しえたのか、ということになるのではないか。それは端的に言って、出生とともに運命的に背負わされた自らの民族問題・植民地問題にいかん対峙するかの問題であったのではないか。このことは植民地時代のみならず、解放後から今日に至るまで、在日朝鮮人のもの書き、作家の根幹的な問題として位置づいてきた。

解放後、民族文学の出発と金達寿

張赫宙や金史良を中心に植民地時代の文学について書いてきたが、在日朝鮮人の文学活動が真に開花するのはやはり日本の敗戦／朝鮮の解放後である。日本と朝鮮が断絶されるなか、朝鮮の解放は実質的には米ソによる分断占領統治となり、1948年8、9月には南北分断国家が成立する。そのため、解放後の在日朝鮮人の創作活動は、「分断体制」の故国（故郷）への往来が許されないなか、日本語で主として書かれていった。もとより、解放を迎えた在日朝鮮人は、一般的には故国の解放に歓喜し、独立国家の建設に邁進しようとしたと考えていいのかも知れない。しかし現実には日々の糧にも困る厳しい生活難に直面し、帰るべき故国は南北分断統治のために混乱を深めていくばかりであった。しかも何よりも、在日朝鮮人にとっては、内面に巣くっている「皇国臣民」の残滓と闘い、「朝鮮人」として転生することが至難の業であった。とくに朝鮮や日本で皇民化教育を受けて育った若い世代は、朝鮮語を知らず、多くは「日本人」として生きることに疑いをもっていなかった。自己を凝視し、朝鮮人としての内実を獲得し、転生していくことがこの上なく困難なことであった解放直後、朝鮮人としての主体形成をなしとげていく必死の努力は、朝鮮語、朝鮮の歴史を学び、朝鮮の文化を身につけることから始まり、それは日本の歴史と社会にたいして批判的に処していくことでもあった。実際、日本の全国各地に朝鮮語学習のための講習所・学校が作られ、また例えば、在日朝鮮人の民衆文化を創りだそうとした梁民基が記録しているように、解放直後には、ブリキの一斗缶を切って、チャンゴを作って、叩いた⁽¹³⁾。

文学は本来、ある特定の時代状況のなかで、その時代状況に抗いながら自己表現するものであることからすると、在日朝鮮人の文学はその出発からして、被支配の歴史と民族・故国の問題、そこにおける在日する生の問題と格闘することを運命づけられていた。同時に、日本・日本人に朝鮮・朝鮮人について知らしめる役割も背負っていた。第二次大戦後、ヨーロッパで旧植民地の独立という問題に直面した知識人・文学者が植民地主義との格闘を迫られ、思想を深めていったのに対し、敗戦によって植民地を失い、また天皇制支配体制が継続する日本では、知識人・文学者はそうした植民地主義との格闘をおろそかにすることになった。そこに植民地支配の所産である在日の知識人・文学者の独自の役割が生まれてくる。実際、解放後間もなく『高麗文芸』（1945.11.-1946.1.）『民主朝鮮』（1946.4.-1950.7.）『朝連文化』（1946.4.-1946.10.）『朝鮮文芸』（1947.10.-1948.11.）『朝鮮評論』（1951.12.-1954.8.）『新しい朝鮮』（1954.11.-1955.9.）などが刊行され、金達寿、張斗植、李殷直、詩人の許南麒、金時鐘、姜舜、らが在日朝鮮人運動の錯綜・変転と時を同じくして、そうした意欲あふれる創作活動を始める。ここで、植民

地から分断という時代の流れにおいて、在日一世の日本語による創作は、海を隔てた「朝鮮」に疼き、それを作品に投影するものであった。民族問題・植民地問題の重みは共有されていた。金達寿は『後裔の街』（1948年）『玄海灘』（1952-1953年）で解放前の朝鮮知識人の民族的自覚を描き、また許南麒は『火縄銃のうた』（1951年）などの刺激的な詩を発表していく。金時鐘は組織の命でサークル詩誌『ヂンダレ』を創刊し（1953年2月）、第一詩集『地平線』（1955年）を出版する。金石範の『鴉の死』（1957年）、1960年代にかけての李殷直の『濁流』（1967-1968年）、金達寿の『太白山脈』（1969年）などは、いずれも分断時代に生きざるをえなかった悲劇と自らの課題を見据えようとしたものである。そして張斗植は『ある在日朝鮮人の記録』（1966年）で在日の苦難に満ちた生活の諸相を綴る。

解放後の在日朝鮮人の文学活動については、2006年に刊行された磯貝治良・黒古一夫編『〈在日〉文学全集』（全18巻、勉誠出版）がその全体像をうまく示している。巻構成は、第1巻の金達寿にはじまり、第2巻・許南麒、第3巻・金石範、第4巻・李恢成、第5巻・金時鐘、第6巻・金鶴泳、第7巻・梁石日とつづいており、のちに「在日朝鮮人文学」と称される文学者たちの作品を収録するとともに、ある意味で、そうした文学者たちの位置づけをうまく配列している。いま、解放後の文学を語っていく場合には、この中でもとくに金達寿と許南麒が重要であろう。

金達寿は1919年慶尚南道生まれで、10歳のと渡日し、納豆売りや廃品回収をしながら一時小学校に学び、回収した古本などを読んで日本語を覚えていく。『少年倶楽部』『立川文庫』に親しみ、やがて16歳頃から「世界思想全集」や「世界文学全集」「現代日本文学全集」などを読み始め、文学に目覚めていく。植民地時代に短篇小説を発表し、朝鮮体験をもってはいたが、本格的には解放後、『民主朝鮮』に『後裔の街』を連載してからのことである。1997年5月77歳で死去するまで生涯にわたって文筆活動をするが、1960年代までは小説を書き、それ以後は古代史探究の「日本の中の朝鮮文化」執筆に主力を注ぐ。日本と朝鮮にまたがる民族問題・植民地問題、朝鮮の文学・文化問題、民族意識のあり方、南北の政治状況と絡んだ個人の生き方など、骨太の小説やリアルな評論を得意とした。

『民主朝鮮』は朝連と密接な関係をもっていたが、その「創刊の辞」にもあるように、在日朝鮮人が日本人の理解を得るために、日本語で発行する朝鮮・朝鮮人紹介の総合文化雑誌であった。金達寿は雑誌のかなりの期間をつうじて編集人をつとめ、また『民主朝鮮』と同じ1946年に創刊された『新日本文学』にも少なからず寄稿し、日本人文学者との「共闘」を模索した。1949年の5月か、6月に日本共産党に入党し、民族主義者から社会主義者へ変わったとも言う。GHQ・日本政府の朝連弾圧が厳しくなっていくなかで、朝鮮人がそれに対抗する形で、大量に組織的に日本共産党に入党していった時期である。

ただ金達寿は新日本文学会などで日本人と「共闘」する立場にあったが、日本共産党が単独講和＝「日本の独立」はアメリカ帝国主義の植民地従属国化であると規定し、反米愛国の民族解放民主革命の闘争を呼びかけていたために、思想的には相容れない部分をもつことになる。つまり金達寿からすれば、日本共産党など日本人の左翼陣営が対米関係で自らを「被抑圧民族」とすると、主として被害者意識に囚われた自己規定・状況認識をしていたなかで、南朝鮮を支配するアメリカ帝国主義と同時に、かつての支配者で解放後も朝鮮・朝鮮人に敵対し差別する日本もまた抵抗し糾弾する対象であった。当然、そこに「共闘」をめぐるギクシャクした問題が起こることにもなった。金達寿が短篇「眼の色」（『新日本文学』1950年12月号）や「富士がみえる村で」（『世界』1951年5月号）で、共闘すべき日本人（被差別部落出身者）による朝鮮人差別を批判的に描いたのもそのひとつの例であろう。

金達寿の最初の長編小説は『後裔の街』である。小さいときから日本で育った著者の分身「高昌倫」は「京城」に来て、純白のチョゴリの美しい従妹（いとこ）「南英梨」に会う。朝鮮語をうまく話せないいらだちを感じながらも、自分を含む一つの確実な民族を目のあたりにみる。故国、故郷の発見であった。この作品はのちに「勤労人民はここでは直接に描かれていない」、しかし「1941年の若き朝鮮イ

ンテリゲンチヤの生活の描写を通じて、我々は独立をうしなつた民族の苦悩と抵抗の姿をまざまざと感得することができる」(蔵原惟人)⁽¹⁴⁾と評されている。

もっとも、さきあげた『〈在日〉文学全集』の第1巻・金達寿では、磯貝治良が「解説・根を植えた人」を執筆し、そこで金達寿の代表作は、と問われれば、即座に『玄海灘』と応えると、書いている。『新日本文学』に連載された長編小説であるが、民族の独立を失った帝国主義支配下の実相はどんなものだったのか。植民地支配の末期、二人の朝鮮人青年、西敬泰と自省五が苛酷な現実のなかで民族に目覚め、拷問を受けて死と対決し、そこで自己変革をなしとげつつ独立運動の闘士となっていく。そこには民族、国家(権力)、支配・被支配の植民地朝鮮における生活と抵抗が描かれ、自由と独立の尊厳が謳われる。この『玄海灘』は1954年に筑摩書房から単行本として出るが、その著者「あとがき」には、朝鮮戦争のさなか、「深夜、頭上をアメリカ軍航空機のとんでゆく爆音をききながら、うんうん唸るような気持でかきつづけた」とある。時代状況に揉まれ、格闘する「全体小説」の性格を帯びつつも、私小説的色彩の濃い初期金達寿の代表作と言ってよい。

金達寿は『前夜の章』(1955年)、『故国の人』(1956年)、『日本の冬』(1957年)、『朴達の裁判』(1959年)などの小説だけでなく、多くの短篇・評論を書いていった。それらは一般的には骨太で、民族の歴史と課題を多様な形で取り上げたものだと評価されるのかも知れない。金達寿はまた、『民主朝鮮』の編集に関わりながら、朝連、民戦、総連と少なからず関係をもち、南北朝鮮の文学界とのつながりを確保しようとした。全体的にいうなら、解放後の在日朝鮮人文学者にとって、日本の民主化と朝鮮の革命・独立が「二重の課題」であったなかで、金達寿もそのひとりとして、大衆と結合した文学者の歴史的任務、植民地支配によって歪められた民族的主体の確立、などに心を砕こうとしたことは否定できない。しかし、事はそう簡単ではない。民戦解散・総連結成のながれの中で、金達寿は日本語で書き、日本のジャーナリズムに身をひたしていると、一部批判的な評価があったことも事実である。その前提として、何よりも、日本に暮らす朝鮮人が、植民地時代の朝鮮・朝鮮人を描くことができるのか、という問題があった。作家の李殷直は『民主朝鮮』が主宰した座談会「われらの放談」で⁽¹⁵⁾、在日朝鮮人の文学者について厳しい批判をしている。「大部分の日本に来て我々というものは自分でちかに闘争していないんだ。血を流していないんだ」と。当然、ここには金達寿も含まれるが、これは何も植民地時代だけのことではなく、今日の視点からするとき、恐らくその後の苛烈な朝鮮戦争の時のことも含む言葉としても受けとめてよいと思われる。

そうしたなか、文芸評論家の水野明善は、許南麒を除く在日朝鮮人の文学者について、とくに金達寿を名指しで、もっと辛辣な批判を加えている。「金達寿もやはり例外ではなかった。戦後日本の文学界に登場したあたらしい文学者の多くがあゆんだのにかよった道を、金達寿もさけることができなかった。ふじゅうぶんなところはあっても、はじめはみずみずしい新鮮なめばえとおもえたものが、やがて売りものになった「みずみずしさ」になり、ことの当然としてそんな「みずみずしさ」はほんものの「みずみずしさ」と縁もゆかりもないものに転化してしまう。いちおうのわるい意味のくろうと的なまとまりのほうに心がひかれ文学がひかれてしまう。にっちもさっちもゆかない停滞の泥沼におちいってしまう。本質的な根本の文学態度には目をして、おもいつきの脱出をこころみ、それが悪あがきとなって、作品の追及力をなえさせてしまう」⁽¹⁶⁾と。

手厳しい批判であるが、じつはこれは『民主朝鮮』第31号(1949年9月)に載った小原元の文芸批評に対する反論でもある。小原が『後裔の街』以後の金達寿の諸作品を「対象にたちむかう作者の確かな姿勢を……感じる」と評価したのに対し、まっこうから対立する物言いである。水野は、「もし個人的友情的な関係のために文学の原則的な問題での意見のくいちがいをたがいに無批判のままに放置するとすれば、それは、はるかに大きな害毒をのこすことになるだろう」とまで言っている。この時点で『民主朝鮮』の編集人は金達寿ではなく、すでに尹炳玉に代わっている。その頃の金達寿の生活はとい

えば、1944年に結婚した金福順が長男を残して病死し、しかも作品執筆だけでなく『民主朝鮮』や『新日本文学』そして朝連などのためにかけずり回りながらも、貧窮の生活を送っていた。たくさん執筆はしたが、原稿料をもらえたのは雑誌『世界』だけだったともいう。年譜によれば⁽¹⁷⁾、1949年に入っていわゆる作家生活を本格的に始め、翌1950年に運良く崔春子という在日二世の女性とめぐりあって再婚する。

必死に生きた金達寿であろうが、酷かも知れないが、ついでにほんの少し遅れて登場した作家の金石範の言葉を掲げておきたい。「金達寿さんは、私の先輩にあたる人ですが、あの人が一時期評価を受けたのは、日本の戦後民主主義の時代ですが、共産党が非常に活発であったような、そんな時代の流れの上にはいたわけですね。彼はそれなりに一定の役割をはたしているけれども、改めて読んでみると、もちろんいい作品もありますよ、でもそれっきりのものが多いんです。彼は、時代的といいますか、社会的背景を持った作品も書いているけれども、志賀直哉の作品を意識した私小説的なものがほとんどでね、……、そういう関係で文学としてやってきているわけです」⁽¹⁸⁾と。こうした評価について金達寿と親しくした詩人の金時鐘に訊いてみたことがあるが、「金達寿の小説は純文学ではなく、私小説とも言いにくい。いろんな作品があるが、全体として「大衆小説」だったと言ってよいのでは」と語っていた（聞き書き、2014.2.21.）。私は一度、金達寿全集にざっと目をとおしてみたが、私小説的とも言えないし、かといって大衆小説と言うわけにもいかない、という感想である。

ここで話を変えると、さきに解放後、在日朝鮮人にとっては「皇国臣民」の残滓と闘うことが重要な課題であったと書いたが、実際には、在日朝鮮人の文学で天皇（制）批判を正面切って主題とした文学作品は意外と少ない。ただ金達寿の『玄海灘』では「皇国臣民の誓詞」をやり玉にあげるなど、天皇制に対する抵抗の一端が描かれており、その点では、貴重な作品であると言ってよい。私の記憶では、ややのちの金石範の作品にも「皇国臣民の誓詞」を揶揄する場面が出てくるが、いずれにしろ、在日朝鮮人の文学ではそう多くはない。これはたぶん、敗戦後、日本の知識人・文学者による天皇（制）批判がうやむやのうちに終わり、結局は「象徴天皇（制）」を受け容れていくのとパラレルの関係であるのではないかと思えてならない。しかもそこには微妙な形で、在日朝鮮人にとっての「北」の問題、とくに1955年5月の朝鮮総連の結成後、金日成を指導者として戴き、追随していく思考のあり方と絡んでいるのではないかと思われる。

金達寿は当初『民主朝鮮』を中心に執筆したが、本名だけでなく孫仁章、金文洙、朴永泰、白仁のペンネームも使った。『民主朝鮮』の最多の寄稿者であると同時に、長らく編集人を務めて雑誌の方向性をリードしていく立場にあった⁽¹⁹⁾。その『民主朝鮮』は朝連の歩みとともに次第に北の金日成を民族解放そして在日朝鮮人運動の指導者として仰いでいくことになるが、そこに金達寿が一定の役割を果たしたのは当然である。金達寿自身は最初は第13号（1947年8月）で「呂運亨先生の生涯」を書くが、やがて『新日本文学』に連載していた「玄海灘」で金日成の抗日闘争を描き、その後も金日成を持ち上げる方向に傾いていく。朝鮮総連結成以降、議長の韓徳銖の協力者となり、また例えば『知性』1956年3月号に「白頭山の虎金日成」を書いている。つまり金達寿は朝鮮民主主義人民共和国（共和国）建国後そして総連結成後、共和国支持・金日成支持の立場を取ったことを示すが、それは逆に大韓民国には厳しい視線を投げかけたことを意味する。

しかしその金達寿は、やがて、1958年9月に刊行した『朝鮮一民族・歴史・文化』（岩波新書）が総連から批判されることによって、組織（祖国）とのあいだに深刻な軋轢をもち、以後、次第に「北」支持の立場から遠ざかっていくようになる。

当時、日本社会には敗戦来の朝鮮観・朝鮮蔑視観が沈潜したままで、約60万人いた在日朝鮮人も、若い世代を中心に朝鮮語はもちろん、自らの民族・歴史・文化についてあまり知らない状況にあった。新書『朝鮮』はその意味では時宜にかなった格好の出版物であり、多くの人から喝采を受けることにな

る。私がいま読んでみても、朝鮮について手際よくまとめていると思われる。読みやすい本だと評価されたともいうが、実際には古代以来の歴史の歩みや儒教・仏教・美術などの概説は必ずしもそうストンと理解できるわけでもなかったらうと思われる。1958年という時点で「李朝」「日韓併合」「京城」「平壤」といった言葉を使い、「朝鮮王朝」「韓国併合」「ソウル」「ピョンヤン」と正しく書いていないことも気になる。しかし朝鮮戦争後の国際情勢をふまえてアメリカ帝国主義・李承晩政権を批判し、金日成抗日パルチザンの延長線上で共和国の発展に期待を表明しているのは、当時の思想状況・政治状況をそれなりにきちんと反映したものだと考えてよい。「明るい朝鮮と暗い朝鮮——。しかしながら、近い将来、それは必ず明るい一つの朝鮮に統一されるであろう」という最後の文章は、金達寿の当時の思想の在りかを明白に物語っているとみてよく、そう目くじらを立てて批判するほどの本ではないと思う。

にもかかわらず、朝鮮総連はこの著作に対して厳しい評価を下し、糾弾のキャンペーンを張る。批判は、金達寿が属していた朝鮮問題研究所でおこなわれた書評会での指摘という形をとっている。『朝鮮民報』（朝鮮語）1958年10月25日付け「金達寿著『朝鮮』に現れた重大な誤謬と欠陥」と題した記事で、「著作は、歴史・民族・文化の面で朝鮮を紹介しているが、それらは科学的立場と、朝鮮民族の革命的伝統に確固として立ってはいない。のみならず、反動的ブルジョア思想体系によって叙述されおり、朝鮮人民としての主体性が欠如している」、「二つの朝鮮」を容認する立場で祖国の分裂を合理化し、朝鮮人民の一貫した統一の念願と、そのための闘争を無視しているだけでなく、共和国北半部に創設された民主基地を正しく把握するのに十分な努力を払っていない」と酷評している。以後、先行研究によると、『朝鮮総聯』『朝鮮文化』『朝鮮問題研究』『アカハタ』などでも批判はつづく⁽²⁰⁾。当時在日本朝鮮文学芸術家同盟（文芸同、1959年6月結成）の部長でさえ、「飛ぶ鳥を落とす権勢を誇っていた」⁽²¹⁾くらいであるから、組織全体による金達寿批判は熾烈を極めるものであった。

しかし考えてみると、まことに勝手な批判である。とくに「反動的ブルジョア思想体系」という表現は、「前衛党」特有の手前味噌な言いぐさそのものである。当時総連はすでに北への帰国運動を積極的に展開し、在日同胞を共和国・金日成に従順な「海外公民」たらしめようと躍起になっていた。1958年10月30日を期して、日本各地で帰国実現を要請する群衆大会が開かれ、全586箇所、7万余の同胞が参加したというくらいである（『朝鮮民報』1958年11月4日）。それは、総連組織内で韓徳銖議長の姪と結婚して姻戚関係となった金炳植が、1958年に周囲の反対を押し切って朝鮮問題研究所所長に取り立てられ、翌年には初代人事部長となり、さらにその後、組織部長、事務局長と階段をのぼっていくなかで、金日成絶対化を御旗にあくなき権力欲をみせ、組織を牛耳っていった軌跡と重なる。金炳植は学歴コンプレックスをもち、日本社会で名の通る朝鮮知識人を忌避し、意に添わない者を「分派」「宗派」と追い詰めていくのをこととした。金達寿はそこで組織的批判の「標的」にされたのであるが、それは金達寿にとって大きな痛苦、試練であったはずである。それでも金達寿は、『文化評論』1962年12月号に「將軍の像」を書いて、金日成將軍について肯定的に描こうとしている。

当然のことながら、新書『朝鮮』はさまざまな弱点や欠点をもつものではあったらうが、しかし文学者の尹学準が〈書評〉で述べたように、『朝鮮』は「日本の人たちの、我々朝鮮人に対するゆがんだイメージ。——これに対して我々は、どのように対決してゆかなければならないのか。……在日朝鮮人運動のすべてはここから出発しなくてはならない」ことを改めて提起する著作であった⁽²²⁾。ともあれ、金達寿はこれ以後、総連との軋轢を抱えながらも、リベラルな創作活動を続けていく。ちなみに、この『朝鮮』は岩波新書のロングセラーとなり、金達寿が1997年5月に肝不全で死亡したあとも、2003年9月、累計約29万部、50刷まで重版された。

詩人・許南麒と朝鮮総連・共和国

さてここで、詩人・許南麒について述べたい。金達寿が総連の批判にさらされていくなかで、許南麒は総連の活動家・知識人として重要な位置を占め続けていく。金達寿は時に朝鮮語で書くこともあったが、ほとんどは日本語で執筆活動をしていた。10歳に渡日したことからして、朝鮮語はそう達者ではなかったはずである。その点、許南麒は1918年慶尚南道生まれで1939年に渡日し、日本大学芸術学部映画科、中央大学法学部、アテネフランセ、太平洋美術学校などで学ぶ。解放後、日本語で発表するかたわら、朝鮮語で詩や小説・評論などを書き、翻訳もしている。作家の李殷直も許南麒と同じであるが、許南麒ほどではない。

許南麒は瘦身で謹厳実直型だったとされるが、『民主朝鮮』の創刊に参加するとともに民族学校の教師・校長として働き、朝連・民戦・総連で活動する。直情的で、喜怒哀楽が激しかったともされる。詩集『朝鮮冬物語』（1949年）、『日本時事詩集』（1950年）、『火繩銃の歌』（1951年）、『巨済島』（1952年）、『許南麒詩集』（1955年）、『朝鮮海峡』（1959年）などを発表していくが、日本語による詩作・翻訳は、文学的な観点と同時に、日本人に対するメッセージを主たる目的にしたとも言える。『民主朝鮮』1950年5月号に田中久介が『「解放詩」第一芸術論—許南麒の作品をめぐって』を書き、その中で許南麒は「いかにも直情的だ」と述べつつ、彼自ら言うように、「祖国の現状を民主日本の再建のためにいそしんでいる日本の人民諸君のために、少しでも正しく報告することが出来ればと思って書くだけである」と紹介している。……／／おまえたち／傷だらけの おれの詩たち、／いまこそ起き上がれ／いまこそ肩を組み／一列にならべ、／おれたち 傷つけられた者、／おれたち 虐げられた者の／ときが来るのだ、／いまこそ鎖をならして立ち上がれ、／／……（「傷だらけの詩にあたえる歌」、『朝鮮冬物語』所収）。

この詩集『朝鮮冬物語』は敗戦直後の日本の詩運動に大きな衝撃を与えたとされているが、その詩集には当時日本のプロレタリア文学運動で大きな位置を占めていた新日本文学会書記長の中野重治が跋文を書いている。許南麒の翻訳詩集には『朝鮮はいま戦いのさ中にある』（1952年）、『長篇叙事詩集 白頭山』（1952年）、『春香伝』（1956年）、『現代朝鮮詩選』（1960年）などがある。詩集の中に「牢獄の塀」「帝国主義」「人民抗争」「パルチザンの烽火」「輝く祖国」「尊い闘い」「社会主義朝鮮」といった言葉が散見されるように、闘いのために詩があり、その闘いの詩のなかに抒情があった。許南麒は渡日する前にも日本語で詩を書いていたとされるが、それらを含めて、許南麒の詩は朝鮮民族の過去から現在、さらに未来にまたがる痛苦そして解放に向かう物語だということができる。許南麒論を書いた呉世宗のいう「歴史的出来事を詩的言語へと昇華させ歴史物語を構築」しようとしたのが、許南麒の詩であったと言っているのかもしれない⁽²³⁾。

許南麒が日本語で詩を書いたのは、1960年頃までのようである。最初詩の創作・翻訳と民族教育に携わっていた許南麒は、1955年5月の朝鮮総連結成とともにその活動家として重きをなすようになる。1956年に朝鮮大学校講師になり、1959年には文芸同初代委員長に就任し、その後は組織の方針にしたがって日本語での執筆はほとんどなくなる。以後、1965年に総連中央文化部長に就任し、翌年には副議長となる。普通の総連活動家というわけではなかったろうが、しかし許南麒は結局は、祖国・共和国・金日成の社会主義に無条件に迎合する道を歩むことによって詩作に精彩を欠き、政治主義に屈服していく。事実上、文学の放棄と言ってよい。

共和国は当初は光り輝く社会主義祖国であった。しかしその政治が次第に金日成の手中に帰していったこと、そしてその政治思想がのちに主体思想とか金日成主義といったものに染め上げられていったことは周知の事実である。たんに政治だけでなく、文学、芸術、文化、その他のあらゆる領域で少しずつ個人崇拜の様相が深まっていく。

植民地時代末期に日本語で創作活動を展開した金史良が、解放直前、北京から日本軍の封鎖線を突破して、劇的な形で中国の解放地区に脱出したことはすでに述べた。その金史良はまもなく解放を迎えるやピョンヤンに帰り、そして朝鮮文学同盟結成式参加の使命を帯びてソウルを訪れる。やがて朝鮮戦争が勃発するや北の従軍作家として活動するが、その間、1945年5月に書いたとされるその抗日脱出の体験記がのちにひとつの文学作品としてまとめられていく。あの『鴛馬万里』であるが、それが最初に活字として現れたのは1946年1月、2月であり、それがまた3月から新たな連載(-1947年7月)として雑誌に収録されている。ソウルの左翼系列の雑誌『民聲』である。それが書き直され、朝鮮解放二周年を記念して『鴛馬万里—延安亡命記』という題でピョンヤンの良書閣から単行本として刊行されたのは1947年8月である。ついでまたそれが、朝鮮戦争で金史良が戦死(1950年)したあと、国立出版社刊の『金史良選集』の中に『鴛馬万里—抗日中国亡命記』と改題されて収められたのは1955年のことである。

問題はその過程で本のテキストが再三、書き改められたことである。さきに取り上げた鄭百秀『コロニアリズムの超克』ではその経過を詳しく検証している。そこで問題となるテキスト変化の核心は「金日成エピソードの挿入」であり、それによって作品が再構成されただけでなく、「抗日闘争文学」といったものの構築が図られたことである。こと細かにここで述べるわけにはいかないが、『民聲』連載には一度も現れなかった金日成エピソードが、1947年版では「白頭山の遊撃隊」の活動として暗示的に紹介され、1955年版では「わが民族の榮譽を四海にとどろかした人民の太陽・金日成将軍に、一衛星部隊の従軍作家として最大の敬意を表する次第である」と序文に語られるようになる。日本語版の『鴛馬万里』(朝日新聞社、1972年)を翻訳した安宇植によれば、1955年版の『鴛馬万里』は、「翻訳の過程でしばしば、原文が不自然に飛躍するのを感じた」と述べている(安宇植「解説」)。

作家の梁石日は、金史良の作品から多くのことを学ぶが、こう述べている。「金史良文学は真摯なりアリズムの追求である」、「在日朝鮮人のリベラルは、歴史的不条理の超克のための闘争を抜きにして論じることは許されない。金史良はこうした超克のための闘争の姿勢を最後まで崩さなかった数少ない一人である」⁽²⁴⁾と。梁石日にとって『鴛馬万里』は大事な作品のひとつであるが、その中味は政治の意志によって少なからず書き換えられていったのである。朝鮮総連の機関紙である『朝鮮新報』2013年7月17日号では、金史良に「共和国英雄称号」が授与されたことと関連して、金史良は中国で長編紀行文『鴛馬万里』を書いたが、そこでは金日成主席を「わが祖国を隅々まで照らす太陽」と称え、抗日遊撃隊を「太陽部隊」と誇り高く称賛した、と大書している。こうしたことをみると、総連・共和国の影響下にある在日朝鮮人作家・詩人の作品が政治の都合によって書き換えられ、あるいは、作者自身、自らすすんでその政治に乗っかろうとした、という事態は十分に予想され、ありえた。

許南麒がそうであったかどうか、いまだ研究が不十分なために、その検証は今後待つしかないが、しかし一部、気になることはすでにある。在日朝鮮人の詩を集めた『在日コリアン詩選集—1916年—2004年』(森田進・佐川亜紀編、土曜美術社出版販売)という大部な本がある。不肖・私の詩も何篇かそこに所載されているが、評論家の加藤周一は〈書評〉で、「残酷な植民地支配と南北分断は、在日コリアンの環境である。そこでのすべての経験は、ふるさとと母語と個人のアイデンティティの緊張関係の中で起こる。……ふるさと—母語—個人の三極構造の意識化は、直接に『在日コリアン詩選集』の語る多くの挿話に反映されている。その豊富な色彩や音色……詩人たちの歌の内容は、彼らが生きた経験と分かち難く、その経験は固有の環境と歴史によって鋭く条件づけられていた」と語っている(『朝日新聞』2005年7月21日、長野版)。

その『在日コリアン詩選集』に許南麒の詩が10篇所載されており、そのなかに在日の民族学校を詠った「これが おれたちの学校だ」というのがある。解放直後の緊張関係のなかでひとつの色彩と音色をもった、よく知られている詩である。／子供たちよ／これが おれたちの学校だ、／／校舎はたとえ

みすぼらしく、／教室はたった一つしかなく、／机は／君たち 身をよせると／キーッと不気味な音を
立て／いまにもつぶれてしまいそうになり、／……／見渡せば／百が百／何一つ満足なものない／
おれたちの学校だ、／だが 子供たちよ、／君たちは／ニホンノガッコウヨリ／イイデス、と／つた
ない朝鮮語で／おれたちも祖国が統一しさえすれば／日本の学校より／何層倍も立派な学校を／建てる
ことができるんじゃないかと／かえって／この涙もろい先生をなぐさめ、／……。

この詩には副題として「—1948年4月、東京都京橋公会堂で開かれた朝鮮人教育不法弾圧反対学父
兄大会によせた朗読のための詩 元朝鮮初級学校長の詩 2」という言葉が付けられている。この詩が
どこから採録されたのかは明らかではないが、総連中心の在日の民族教育の闘いの中で長らく読み継が
れてきたことは確かである。しかし1948年4月という時点で詠われた詩で、「祖国」とか「統一」とい
う言葉が使われているのはやはり不自然であると考えてもよい。「母国」や「祖国」という言葉は日本
の植民地時代には使えなかったものであり、その延長線上でまだ国家をもっていなかった在日朝鮮人
は、例えば金達寿の『後裔の街』や『玄海灘』に見られるように「故国」という言葉を多く使ったので
はないかと思われる。そんな気がして文献をあさってみるとやはり、この詩は最初は「村教員の詩」と
いう題で、『解放新聞』1948年4月25日号（朝鮮語）に載っていることが分かった⁽²⁵⁾。朝鮮語の原詩
を日本語に直訳していうと、「おれたちも独立さえすれば」という部分が、のちに「おれたちも祖国が
統一しさえすれば」と、「祖国」および「統一」という言葉を新たに使って書き直されていったことが
分かる。普通に考えれば、1948年8月、9月の分断国家の成立後のことであるが、当然のことながら、
「祖国」には社会主義祖国というニュアンスが含まれており、また「統一」は共和国主導の分断克服・
統一達成を含意している。

これは当時の政治状況の推移、そしてその中における作者・許南麒の思想の変化（「発展」）を示すも
のであり、また詩が活字になるにあたっては、その都度、その都度、作者によって手がくわえられるの
も常であり、その意味では、そう目くじらを立てて言うことでもなさそうでもある。しかし、その作者
が総連組織に深入りし、政治主義を強めていった許南麒となると、やはり何か納得できない気持ちにも
なる。

ここで気になるのは、いったい許南麒の詩、詩作の方法、その政治性、そして日本語か朝鮮語か、と
いったことをどう評価するかである。朝鮮大学校文学部教員の孫志遠が『鶏は鳴かずにはいられない—
許南麒物語』（朝鮮青年社、1993年）を書いているが、許南麒の深層を理解するにはあまり役にたたな
い。参考になるのは、作家・詩人の梁石日がかろうじて許南麒を批判した文章だけである。総連の弾圧
を受けて廃刊を余儀なくされたサークル詩誌『ゼンダレ』を継いだ『カリオン』（全3号、1959.6.—
1963.2.）の第2号（1959年11月）に、梁石日が書いた「方法以前の抒情—許南麒の作品について」で
ある。梁石日は金時鐘らとともに、共和国そして総連で権威主義的な政治体制が確立されていく時期、
政治運動に還元できない詩運動の固有性に立脚しようと奮闘するが、その際、許南麒の詩について鋭い
批判の論を展開している。

「許南麒の詩に顕著な朝鮮民族の悲哀、慟哭、憤怒の類は、許南麒一人の心情の現れではなく、彼と
世代を前後する朝鮮インテリゲンチヤたちの素朴な典型であり、因襲的な朝鮮歴史のカテゴリに束縛
されて脱皮することのできない郷愁にほかならない。……すでに、外部には朝鮮人に対する一つの偏見
が出来上がっている。……日本の進歩的知識人の中には、日本帝国主義に対する憎悪の念があると同時
に、日本帝国主義の犠牲となって長い年月を苛酷な圧迫に耐えてきた朝鮮人に対して同情している。そ
して朝鮮の歴史がいまだかつて植民地的状態から解放されることがないイメージが、同情をより同情
的にしているといえる。……内部にもまた一つの偏見が出来上がっている。それは朝鮮人自身も、われ
われは悲劇の民族であり（そのことは間違いないが）その悲劇を否定せず肯定的なところで、すべての
問題を演繹し帰納し、われわれは決してこの悲劇から逃れることのできない運命にあるといった潜在意

識が濃厚に支配的だ。そして、この悲劇性を外部におしつけ、無意識裡に外部からの同情をかい、それにもたれかかっていた。……今年の四月に出版した「朝鮮海峡」は、あらゆる意味で彼の限界を示している。「アリア」「傷口」「海」「眺望」「帰心」等、いずれも相変らずのマンネリズムから脱皮できず、中には一步後退の作品さへ見受けられる。……許南麒はおそらく真に苦悩する人間像を知らないものと思う。ずたずたに引裂かれた人間の虚無の美しさを。その氷結した炎のエネルギーの強さを。一度はほくらの経験するであろう世界を彼は経験していないのかもしれない。そして彼は逃げる。逃げることによってのみ彼の傷口は癒されるのだ。……ほくらは断言する。ほくらはもはや許南麒から何ものをも期待することはできない。彼の仕事は、すでに「朝鮮冬物語」の一部の作品で終わっているのだ」と。

長い引用になったが、弱冠23歳のときの梁石日である。やや生硬な文章表現はやむを得ないというべきか。ここで梁石日は許南麒の詩を部分的に引用しながら論を展開しているが、いまそれを全部紹介する余裕はない。しかし梁石日が許南麒の詩的言語による歴史物語の描写に異を唱えていることは確かである。「許南麒ブーム」と言われたほどに日本の左翼・文化人に少なからず愛された美しい詩ではあるが、朝鮮人自身の内なる葛藤、矛盾、悲劇が詠われていないのでは、と主張しているようである。朝鮮・朝鮮人の悲劇を日本人に訴えるだけではダメなのだと……。許南麒の代表的な詩集『火繩銃のうた』に付けられた副題は「朝鮮の 多くの悲しい妻と母と、娘達におくる」であるが、私自身、この副題そのものに、許南麒の詩の美しさと弱さがあるように思えてならない。それは許南麒の精神のあり方がどんなものであったかを推測させることにつながる。

許南麒をはじめ在日詩人は、朝連時代の朝鮮語新聞『解放新聞』や総連結成後の朝鮮語機関紙『朝鮮民報』など、また解放後少なからず出版された朝鮮語雑誌などに朝鮮語の詩を載せた。とくに総連は朝鮮語による創作を積極的に奨励し、また民族学校の授業などで朝鮮語による詩作をすすめていくが、それらが朝鮮語の学習や民族文化の理解、民族意識の培養に肯定的な意味をもったことはいまでもない。許南麒の場合、彼の詩が共和国の新聞や雑誌に掲載され、あるいは単行本として刊行されたのは確かである。それは本国の詩と一体のものとして扱われたと考えてよく、強いて区別するとしても、それは「海外同胞」ないし「在日同胞」の創作詩として扱われたのではないかと思われる。ただ、私は、許南麒は基本的には日本語で詩作したのではないかとも思う。そのことは、許南麒がたくさん書いたという朝鮮語の詩が、硬質な、あるいはぎこちない政治詩であるように思えることがあるからである。

しかも朝鮮語で創作するといっても、世代がかわっていくなかで、朝鮮語による創作が次第に難しくなっていくのも事実である。それを文学、とくに詩作という面から捉えるとどうなるのか。ややのちになってであるが、詩人の金時鐘はつぎのように述べている。「在日朝鮮人が文学するというとき、よしんば朝鮮語で書いたところでね、そういう急ごしらえの、抽象の“祖国”に似せて使われる擬似朝鮮語では、決して在日朝鮮人語を表明できる言葉とはならない。それはまったくもって、朝総連的な、教科書言語でしかない。私たちには好もうと好むまいと、いかに朝鮮から切りたいと思っていようと、宿業みたいに受け継がれている生理言語が体内にとどこおっている。この言葉を目的意識的に発掘できる表現者が、在日朝鮮人文学の創造者であると思う」⁽²⁶⁾と。しかも、その後の在日の歩みをみると、日本定住、世代交代によって、この体内にとどこおっているという生理言語もまた、衰退していくことになる。

歴史認識と文学者、逸脱した張赫宙、そして立原正秋

ここで在日朝鮮人、とくに一世が生きた時代をどう理解すべきかについて改めて述べておきたい。それは歴史をどう認識し、自らの立ち位置をどう理解するかの話になる。そうした意味で考えてみると、日本近代史には大きくって三つの柱があったと言える。一つは西欧の日本侵略、つまり西欧からする

と資本主義市場の新たな獲得であり、二つはそれに対抗して日本が天皇制国家を創出し、天皇中心の国家建設・国民統合をはかったことであり、そして三つは、しかしそれだけでは現実の強大な侵略に対抗できずに、自らの独立を確保するためにアジアを侵略していったことである。国家のイデオロギー装置である国民教育でいうなら、西欧崇拜思想、天皇制イデオロギー、アジア蔑視観の三本柱で日本「国民」のアイデンティティをつくりあげていったことになる。同じように朝鮮近代史の三つの柱とえば、反帝反封建の闘い、植民地近代の強要、南北分断の三つであり、したがって未来に向けた志向や目標という場合には、反帝反封建の闘いを推し進め、植民地支配の残滓を清算し、南北分断を克服する、ということになる。

これはどちらかという、社会科学的な考えから導き出されるものであるかも知れないが、しかし在日朝鮮人の文学者たちが基本的にはこれと同じ枠内にいたことは確かである。もとより文学は、時代を凝視し、そこでの自らの生活や思想を表出し、ときに未来に向けた志向や目標を題材とするものである。当然、その本質的な規定性からするとき、在日朝鮮人の文学は日本近代史の三つの柱と朝鮮近代史の三つの柱を同時に意識せざるをえないものであったはずである。事実、金達寿や許南麒をはじめとする一世の作家・詩人の創作は、やはりこの線に沿うものであったと考えてよい。

ただこれを張赫宙にあてはめて考えてみると、張赫宙は最初は朝鮮の現実を直視して執筆をおこなおうとしたが、植民地末期には次第に民族的主体性を喪失し、自ら転落の道を転がっていき、さらに解放後は内面的な葛藤の累積があったにしろ、いまあげた在日朝鮮人として考えるべき枠組みを逸脱していくことになる。実際、解放後、張赫宙は親日文学者の代表的存在として汚名を一身に受ける中、それでも在日朝鮮人の一人として身構えていたように思われる。1946年には早くも長編『孤児たち』(万里閣)を出す、それは上野などで見かける戦災孤児たちの痛ましい姿を描いたものである。そして短いエッセイなどを雑誌に発表していくが、『世界春秋』1949年12月号に書いた「在日朝鮮人批判」では、信州の満員すし詰め汽車に乗った張赫宙が、列車が停まったある駅で窓から乗り込んできた朝鮮人四人が、大変乱暴な振る舞いをするのに驚き、不愉快であった、凶太さに呆れた、と、彼らが下車するまでの2時間、耐えに耐え、泣きべそをかいたことを記している。張赫宙はこうしてその後も、同胞朝鮮人の立ち居振る舞いに不満を呈していくが、それはいわゆる在日朝鮮人の負性を定式化することであり、張赫宙の自民族観をそのまま反映するものであった。

このエッセイを読んで、朝連機関紙『朝連中央時報』の嘱託として働いたことのある渡来四百年の苗代川出身「帰化朝鮮人」の姜魏堂⁽²⁷⁾は、こう書いている。「その中に、然し私は、遂に何らの「悪意」を発見することは出来なかった。氏自らが冒頭しているように「同族を愛すればこそ」の悪まれ口であることが、私にはよくわかるからだ」、「氏は朝連にも属していなかったし、民団にも関係はないらしい。少くとも、氏の執筆態度には、公平なる第三者としての自負が見られる」と。しかし姜魏堂はつづけていう。「汽車や電車の中での出来事に至っては、それは朝鮮人だけに限られた乱暴では決してなかった」、「にも拘らずその理解が、氏の独断の前に無力なのは、氏がそのような残虐な圧迫を身を以て体得されず、特等席に在って傍観されていたがためではなからうか。その特等席が、主として氏の恵まれた才能の賜であったにもせよだ」⁽²⁸⁾と。

張赫宙は解放後もなお植民地的状況にあった在日朝鮮人、苛酷な運命にさらされた被抑圧者の実相に鈍感であったというべきか。あるいは日本と朝鮮に横たわる歴史認識の異相に無知であったというべきか。張赫宙が雑誌『民論』に書いた「民族随想：在日朝鮮同胞を憶う」(第15号、1948年7月)には、そうした張赫宙の思想、精神の構え方がもろに出ている。このエッセイでいう「神戸事件」とは、1948年4月、朝鮮人学校閉鎖を強行したGHQ・日本政府に反対した神戸・大阪の朝鮮人が強力な示威運動を展開したことに対して、とくにGHQが日本占領期間中、最初にして、最後の非常事態宣言を出し、無慈悲に同胞大衆に襲いかかって16歳の金太一少年を射殺し、多くの同胞を連行した事件である。

「神戸事件の時、ラジオは連日その報道で、喚いていた。……それを結論だけを、一言でいってしまえば、朝鮮人は揚足をとられた、又は、急所をつかれた朝鮮人、ということになる。揚足をとった報道機関の、その公正な論調にも拘らず、ある事大主義的な態度に、私は不満を持った。とそれよりも激しく、同胞の反論理的な行動に悲嘆した。……しかし、私には同胞諸君に対しては、何ら発言権がないことを自覚した。それは私が所謂戦争中に、筆を折らなかったことから感じる自責と、今も、又、将来にも、日本文壇に作家の籍を置くということのためである。……だから、終戦後現れ出た朝鮮人団体から、親日家、対日協力者、民族反逆者の罪名をきせられても、私は一言も反対を唱えなかったのである。……日本に居る朝鮮人は、教育も教養も低い人が多い。……同胞よ、われわれは、感情が豊かで、その割に理性に欠けていることを自覚せねばならない。この豊かな感情が、学問に、芸術に生かされる時は、必ずや優秀の文化を生むことと信ずる。けれども、適当の理性で検討することなく、政治闘争に、個人の嫉妬的反発抗争に向う時は、激昂を暴行と破壊しか招来しないことは、今日のいろ／＼な事実が証明している」と。

私がこの文章について強いてコメントする必要はなかろうと思う。その後張赫宙は、朝鮮戦争の悲惨を描いた長篇『嗚呼朝鮮』（新潮社、1952年5月）を出したあと、同じ年の10月サンフランシスコ講話条約で独立を回復した日本政府から、「帰化を許されて」野口稔を名乗ることになる。こうして「卑屈さ」を内面奥深くに沈潜させた張赫宙は、1954年に野口赫宙の名で自伝的長篇『遍歴の調書』（新潮社）を出す。以後、1975年に再び野口赫宙名で長編『嵐の詩一日朝の谷間に生きた帰化人の航路』（講談社）を出す。以後、1997年2月、92歳で生涯を終えるまで、張赫宙は「親日」行為という決定的な負の遺産を背負いつつも、それと正面から対峙することを避け、それでも朝鮮出身の「私」にこだわりつづけて生きた。

さて、張赫宙について書いた以上、ここで作家・立原正秋について述べておくのがよかろう。張赫宙が在日のひとつの精神態度を示したとすれば、立原正秋はもっとはっきりした形で、いわば在日の「民族主義」の対極に位置する精神態度を示したと言える。

知る人ぞ知る、立原正秋は1926年慶尚北道安東生まれ、本名・金胤奎（キム・ユンギユ）の在日朝鮮人一世である。しかし立原は、自身を朝鮮貴族と日本人との混血日本人であると規定し、のちには高貴な家柄の出身だと虚飾を幾重にもふくらませ、本当の出自を隠しつづけたと言われている。年譜によると⁽²⁹⁾、1937年、21歳の時に渡日、私立横須賀商業学校などで学び文学や哲学の本を読み、日本の古典や仏典にも関心を示していく。ほんの一時期、創氏改名によって金井正秋となるが、1944年3月に一時京城を訪れたあと、再び横須賀に戻って、解放後は早稲田大学国文科聴講生として文学を学びつつ、創作にも乗り出す。1948年に日本人女性・米本光代と結婚して日本国籍を取得し、以後、米本姓を名乗るとともに、闇商売やセールスマン、夜警などをしながら創作に打ち込む。世阿弥の『風姿花伝』にみられる芸術論など日本の中世文学に深く沈潜し、「中世」をみずからの創作活動の原点にしたという。1960年代後半以降の代表作に『険ヶ崎』『冬の旅』『残りの雪』『冬のかたみに』などがあり、何度か芥川賞候補になるとともに、第五回直木賞を受賞し、のちには『早稲田文学』の編集長を務めるなど、日本文学の大御所となる。自ら「純文学と大衆文学の両刀使い」と称し、その大人の愛を描いた小説は多くの人に読まれた。

他方、立原正秋は歳をとるとともに故郷への想いを深くし、1973年、47歳の時に29年ぶりに韓国を訪問して生家を確認し、そして生活のすみずみまで独自の美学を徹底していくなかで、とくに高麗青磁や朝鮮白磁の美しさにのめり込んでいく。1980年、54歳で亡くなるが、死去前年に年譜作者である武田勝彦に本名が金胤奎であることをようやく認める。そして死去2か月前に米本姓からペンネーム「立原正秋」への改名が横浜家庭裁判所から認められる。生涯で使った名前は全部で六つだという。

ただ、ここで重要なのは、作家・立原正秋は最初から日本人・立原正秋として生きたのではないとい

うことである。GHQ 占領下にアメリカ軍が収集した新聞・雑誌の検閲文書「プランゲ文庫」（メリーランド大学所蔵）を調査した川崎賢子は、1946 年以後、1950 年まで、彼がときに通名の「金井正秋」で、またときに「立原正秋」で、さらに本名の「金瀧奎」で詩やエッセイ、小説などを発表したことを明らかにしている。その数はいまのところ 5 篇が確認されているという。立原正秋のペンネームを継続して使っていたのは、丹羽文雄主宰の雑誌『文学者』1951 年 10 月号掲載の「晩夏一或は別れの曲」からであるようである（『朝日新聞』2008.11.1.）。この時期、故国朝鮮は戦争の悲惨のなかにあり、在日朝鮮人は貧窮の生活のまま、民戦の反戦武装闘争など混乱の極にあった。朝鮮人か日本人か、金瀧奎か立原正秋か、まさに人生の岐路であった。

緊張の連続であったこの時期、本名の金瀧奎の名で活字にした「ある父子」は在日朝鮮人が発行する『自由朝鮮』1949 年 2 月号に掲載されている。その冒頭には詩が掲げられている。／にんげんのすむくにが／ひとむかしたのくにの／にんげんにさらわれた／／たべるものもちさられ／きるきものはぎとられ／すむところうばわれて／／よむことをきんぜられ／かくこともとだえられ／まなぶことうばわれて／／……／／めしくれとさけぶもの／ほんくれとさけぶもの／このすべてころされた／／。まさに日本の朝鮮支配を告発する詩であるが、以下、本文も、生まれ故郷慶尚北道を舞台に、朝鮮人少年の眼差しで虐げられる者の貧困と悲哀を描いたものである。

立原文学は日本文学なのか、在日朝鮮人の文学なのか、こうした問いかけをすることも可能であろうが、私自身は、そうしたことにはあまり関心がない。立原は『険ヶ崎』（1964 年発表）では、混血は罪悪かという命題を立て、日本人と朝鮮人（韓国人）は乗り超え不能の対極にあるとし、日本の島国根性を批判しながらも、作中の主人公をして「日本人として生きる覚悟」を語らせている。そこに立原の孤独の深さを読み取ることができるが、ただ立原が内面奥深く、生涯にわたって朝鮮を意識しつづけたことは間違いない。その点、立原文学の特徴は美意識の追求にあるといわれるが、それは日本人になりきろうとした立原にとってアイデンティティ追求のひとつの方法にはなりえても、その根底にはやはり民族にまつわる葛藤が疼いていた。つまり出自を隠して「孤独」のなかに沈潜していたようにみえる立原文学も、迂遠的であっても、在日朝鮮人の文学につらなる何かを備えていたと考えられる。もとより、ひとは偶然的・運命的にこの世に産み落とされる。時代も地域も国も、父母の貧富も選択できるわけではない。いわゆる「出自」であるが、ひとは誰でも自分の出自を理解し、肯定しようとすることによって、初めて真つ当な人生を歩めるのではないかと思う。文学を志す者も、当然、出自にまつわる自らの立ち位置をきちんとふまえることが必要であり、出自を隠蔽して描く作品世界は、それ自体、虚偽の風景とならざるを得ない。立原が恋愛や愛欲の小説を書いた流行作家だったといっても、その根底にはやはり自らの出自をめぐるこだわりが渦巻いていた。

日本文学研究者の金貞恵は、立原正秋がもった緊張感が立原を美的志向へと導き、また「文化がない」在日朝鮮人一世が「美」に対して日本人以上にこだわり、室町時代の賤民たちが築いた庭や能にみられる日本の伝統美にのめり込んだ理由もここにあるのではないかという。実際、立原文学にはその出自を思わせる描写が随所に表れており、また立原が暮らした鎌倉自体、立原の生まれ故郷である安東郊外に酷似し、鎌倉の瑞泉寺は安東郊外の鳳停寺に比せられるとまで述べている⁽³⁰⁾。在日一世に文化がなかったという言い方には留保せざるをえないが、しかし大枠でこのように考えるとき、立原が日本人であろうと執着したとはいえ、その創作の内面は朝鮮との格闘、こだわりが核心をなしていたとも思われる。その意味では、立原は張赫宙とは違った意味であっても、在日朝鮮人の負の部分に囚われていたことになる。

もうひとつ、評論家の四方田犬彦が「立原正秋という問題」⁽³¹⁾という文章を書いているのに留意したい。四方田は「抑圧された民族意識はかならず文学に支えを求めるもの」という命題を提出し、最初から安全地帯の内側で保護されている日本の文学者と区別して在日の文学者に関心をもっている。立原

たとえば、「和食から着物，能楽と，日本文化のもっとも洗練された精髓を体現した作家として」知られ、「誰もが日本人と信じて疑わなかった」作家である。「つねに着物を優雅に着こなして鎌倉の古寺のわきを散歩する」が、「ほかならぬ立原の隠蔽の身振りと徹底した日本回帰こそが，在日文学者としての彼に固有のあり方であった」と思いきって発想を転換してみてもどうかという。つまり「立原の生涯を貫いていた「本物の」日本文化の探求という行為を，もとより本物の日本文化のみならず，本物の朝鮮文化からも疎外されて育った知識人の心理的代償行為であると理解してみるとすれば，どうであろうか」というのである。私自身は，四方田のこうした文学評論の物言いに少しとまどいつつも，やはりそう理解してもいいのかな，と思ひもする。

ここで四方田犬彦も引用しているが，芥川賞作家の高井有一が書いた『立原正秋』（新潮社，1991年）という評伝がある。立原正秋の死後10年，親交の思い出，哀悼の念と鎮魂の情，作品批評，年譜の虚構をめぐる事実の追求など，立原正秋という一人の人間を見事に浮き彫りにした本であるが，その中で，立原がもう少し生きていたら，という部分に気を引かれる。「出自をめぐる晩年の彼の言動を追ってみると，一見激しく揺れ動いてゐるやうでありながら，その底に一貫した願望が潜んでゐることが読み取れる。一たん築き上げた虚構を打ち壊して，その束縛から自由になり，在りのままに生きたいといふ願望。……立原正秋がもう少し生きて，あからさまな事実を受け容れるだけの心の余裕を持たなければ，彼の文学は変り，もっと自在な境地を獲得出来た可能性がある」と。もうひとつ，「九章 或る女人の物語」で，立原には日本人妻とは別に，最後の約10年間，ときに会食し，時に散歩し，京都や奈良，神戸，仙台など，小説に登場するところにはほとんど一緒に旅をし，お寺や骨董屋も見てまわったという女性がいたことが書かれている。たぶんその女性は着物の似合うひとであったと想像されるが，立原は彼女に，「むかしの韓国の思ひ出を，ぽつん，ぽつんといふ感じで語ってくださったりもいたしました」という。その女性曰く，「先生はほんとに寂しがり屋でした。東京へ出ていらした日は，ひとりで歩くのが寂しいとおっしゃって，わたくしがよくお供をいたしました」と。

人間はすべからく孤独の人生を歩むのであろう。立原正秋もそうであった。高井有一『立原正秋』の文庫版（新潮文庫，1994年）に尹学準が「あとがき」を書いているが，そこでは「なぜ立原は己の出自をこれほどまでに粉飾に粉飾を重ねなければならなかったのか。それは，彼の貧しい生い立ちと，惨めな家庭環境からきた激しい劣等意識からではなかったかとわたしは思うのだ」と端的に記している。立原の劣等意識はそのまま孤独につながっていた。実際，高井有一は立原の孤独について触れながら，自ら虚像をつくり出して生きることが，想像を絶する日々の緊張感の連続であったことを示唆している。ただ，立原だけでなく，在日朝鮮人の一世作家はおしなべて劣等意識にさいなまれ，孤独の淵に落ち込んでいたと言ってもよい。たとえ作品表現の方法や方向が正反対にみえても，生活の貧窮，そして緊張感の連続と孤独という意味では等しく同じではなかったかと思える。

金石範と金時鐘

1950年前後に登場した在日朝鮮人の文学者をみると，金石範と詩人の金時鐘は際だった存在であるが，二人もまた，貧窮，緊張，孤独の淵から文学をすることによって必死に這い上がろうとした文学者である。

金石範は，年譜によれば⁽³²⁾，濟州島出身の両親のもとで1925年に大阪で生まれる。本名は愼陽根。解放までに何度か濟州島に渡るが，解放前年に大韓民国臨時政府がある中国・重慶への亡命を胸に秘めて故国に戻るも，結局果たせずに大阪に舞い戻る。戦線離脱で解放を迎えたことに負い目を感じ，解放の年11月に引き揚げるつもりで日本からソウルに渡るが，信託統治の是非で政情荒れ狂うのを体験する。1946年夏，大阪に「密航」し，その後，当初の意に反して日本に住み続けることになる。日本共

産党に入党して活動するが、1948年4月の済州島人民蜂起のあと「密航者」が大阪に集まりはじめ、そこで虐殺の真相を聞いて、終生を支配する衝撃を受ける。苦学の末、京都大学文学部美学科を卒業（卒業論文「芸術とイデオロギー」）したあと民戦傘下の民族学校で仕事をし、また雑誌『朝鮮評論』の創刊（1951年12月）に関わる。1952年には日本共産党を離脱して仙台で北朝鮮直結の地下組織に入って活動するも、極度の神経症を患って任務を放棄する。党や組織が絶対的な権威であった時代、二つの革命組織から離脱してほとんど政治生命が切れたなかで、大阪で工場労働などをする。

金石範は『朝鮮評論』創刊号に筆名・朴槿で「一九四九年頃の日誌より—「死の山」の一節より」を載せ、済州島での弾圧・虐殺の様相をはじめて活字にする⁽³³⁾。1948年4月以後、朝鮮米軍政庁と李承晩政権に抗した島民が武力弾圧され、島民の5人に1人にあたる6万人が虐殺されたとも言われる。金石範は1957年5月、日本人女性の久利定子と結婚するが、同じ年、「看守朴書房」を『文芸首都』8月号に、また「鴉の死」を同じく『文芸首都』12月号に発表する。1959年12月、北への帰国船が出る頃、金石範は大阪・鶴橋駅近くで妻とともにやきとり屋台を出し、人びとから大いに驚かれる。その後一時大阪朝鮮高校の教師となり、さらに1961年10月から総連機関紙『朝鮮新報』編集局に入り、東京へ転居する。

金石範の創作活動は済州島4・3事件を凝視することにあると言っても過言ではない。その場合、金石範にとって、4・3事件の現場に立ち会えなかった無念さがむしろ創作のバネになったと言ってもよいのかも知れない。しかもその文体は必ずしも読みやすいものというわけではない。私自身、たしか32歳のとき、単行本となった『鴉の死』（新興書房、1967年）を読もうとしたが、少し読んだだけで躓いてしまった。

『鴉の死』ではおびただしい死が描かれる。主人公の丁基俊は済州米軍政庁の通訳で、政府側の情報に接する立場にある。その幼なじみである張龍石は漢拏山パルチザンの指導者である。「革命家」丁基俊はこうして漢拏山パルチザンに弾圧側の情報を伝える唯一の接点として位置するが、恋人だった張龍石の妹・亮順（ヤンスニ）に真実を告げることが許されない。やがて亮順とその両親は「アカ」として「公開死刑」の場に送られる。金網のなかに亮順の姿を認めた基俊は、ただ大声をほり上げて彼女の足元にひれ伏し、すべてを告白したい大きな衝動に突き上げられる。「——亮順は、永遠に死んでいく。同時に自分も死なねばならぬ。彼女の中で死なねばならぬ。犬のように死なねばならぬ」。しかし苛酷な任務を背負った基俊には、彼女に証をたてる機会は永遠になかった。「党のために祖国のために！これがこの一瞬の彼をなお不幸にし、おのれを空しゅうできなかったのだ。恐るべき良心の安泰のために、彼は自分の人間を殺し、亮順の良心を殺した」。

『鴉の死』で、「孤独」という言葉は作品のほとんど最後で、一回だけ登場する。「その名において亮順の心を殺した党も祖国も彼女の涙の一滴に値するものさえつぐないえないのだ。基俊は張龍石を憎み、党を憎んだ。そして祖国を憎んだ」。その悲惨を乗り越え、生きていくためであろう、亮順らの処刑を最後まで見届けた基俊は、別の日、警察署の玄関近くに投げ出された五、六体の死体のなかに亮順の白い影がひるがえっている少女を認め、まずそこに羽ばたいてきた鴉を一発の弾丸で撃ち殺し、ついで少女の胸に静かに三発をつづけて撃ち込む。こうして『鴉の死』では作中の主人公を表して「この充実の中で彼は孤独をおしのけた」「すべては終り、すべては始まったのだ——彼は生きねばならぬと思った」と、なおも解放を志向する方向で語られている。

金石範は4・3事件を歴史小説として書くつもりはないと言う。「ともかく人生、本当に無を意識したところでは、常に自殺を考えなきゃいけない。死なない限りはこれは肯定、生きることは人生の肯定」だと。そこから「革命」が不可欠になる。「ニヒリズムを克服するために、『鴉の死』を書くことで、生きるという現実を肯定する」。しかも「現実の革命は敗北したけど、虚無を克服する革命とは何かを追求したい」⁽³⁴⁾と。それはひと言でいうと、文学をやり続けることであった。事実、金石範は以後、生

涯をつうじて国家と民族、革命と自由、正義と不義、歴史と記憶、言語と思想といった主題と真正面から格闘し、自らのゆるぎない思想と信念を作品化していく。それは暴力、虐殺、破壊といった現実世界の悲惨の前に立ちすくむのではなく、在日朝鮮人として人間存在の根源的な意味を問い続けていくことであった。

金石範が直線的な眼差しで済州島の民衆を凝視したとするなら、金時鐘は在日朝鮮人の生活の中で民衆を凝視する。別の言葉でいえば、金石範が4・3事件を描くなかで生きていこうとしたとするなら、金時鐘は、在日を描くなかで生きていこうとした。実際、4・3事件に直接関わって日本に「密航」してきた金時鐘は、韓国ファッショ政権が陰惨な過去を隠蔽しつづけるなか、4・3事件の蜂起に直接関わった体験については2000年に入るまでほとんど沈黙を続ける⁽³⁵⁾。

詩人・金時鐘は在日朝鮮人の文学、とくに詩の分野で大きな足跡を残してきた。しかしその思想遍歴、精神遍歴は金石範と同じく、苛酷なものであった。年譜によれば⁽³⁶⁾、1929年元山生まれ。のちに母方の縁で、いわゆる政治犯の流刑の地で名高い済州島に移り住む。早くから父の本箱にあった小説・世界文学全集などの本を読み、また北原白秋や島崎藤村、そして金素雲訳の朝鮮詩集『乳色の雲』などに親しむ。とくに「廃絶される運命の朝鮮語の遺産を日本語で編みなそうと腐心した」金素雲の訳詩集については「文語、雅語までも自由にこなしている訳者の玄妙な日本語によって、私は初めて心情の機微のふるえのような朝鮮の詩情に触れたのです」と述懐している⁽³⁷⁾。

こうして金時鐘は、植民地教育を受けて模範的な皇国少年に育っていくが、それは寡黙なまま突堤に座りつづけ、釣り糸を垂らす父との間の断絶、心に刺さるせめぎ合いのなかでのことであった。親を押しつけなければ「日本人」になれなかった小さい魂の喘ぎの中で、学校で習う唱歌や童歌、そして叙情詩は、知らず知らずのうちに「皇国臣民としての情操寛容」の基礎になっていった。その時点で金時鐘は抒情が孕む「暴力性」を見抜けなかった。やがて解放。朝鮮の文字も知らない皇国少年は、故国が蘇ったとき、「日本」から見放された正体不明の若者でしかなかった。植民地からの回天ともなった17歳の年、そこから金時鐘は父の真実を知りはじめ、故国の歴史と言葉に出会い、民衆の熱気に天池が揺れ動く現実遭遇していく。

そうした金時鐘は、1948年4月以後、済州島4・3事件に関わったため、父が手配してくれた「密航船」で、1949年6月に神戸沖（須磨付近）で上陸する。すぐに日本共産党に入党して活動をはじめ、組織の支援で外国人登録証を手に入れる。強制送還されれば処刑の危険があった時代である。1950年5月26日、『新大阪新聞』の募集欄「働く人の詩」に最初の日本語詩が掲載される。筆名は「工員林大造」であった。李承晩政権に抗った金時鐘は、韓国建国の不当性を骨の髄まで染み渡るほど承知していたために、北の共和国は「正義」そのものであった。共和国・金日成を信じた金時鐘は、社会主義祖国をみちびきの星として、在日朝鮮人同胞社会のなかで精力的に詩作をしていく。それは貧困と複雑な政治状況のなかで、自らを発見し、鍛え上げ、仲間とともに文学／政治運動に邁進していく日々であった。金時鐘はのちに「在日を生きる」というテーゼを掲げるが、それは金時鐘が言い出した言葉で、その本来の意味は「在日を生きる実存」である。

金時鐘はさきに触れた1951年12月創刊の『朝鮮評論』に詩「流民哀歌」を発表する。そうしたなかで、金時鐘の初期の活動で大きなものは、1953年2月に民戦大阪府委員会文化部の決定にしたがって朝鮮詩人集団（のち大阪朝鮮詩人集団）のサークル詩誌『ゲンダレ』を創刊したことである。「創刊のことば」に曰く。「詩とは何か？ 高度の知性を要するもののように、どうも私達には手なれ難い。だが、難しく考えすぎる必要はなさそうだ。最早私達は、喉元をついて出るこの言葉を、どうしようもない。生のままの血塊のような怒り、しんそこ飢えきったものの、“メシ”の一言に尽きるだろう。……さあ友よ、前進だ！ 腕をくみ、高らかに不死鳥を歌い続けよう、この胸底の、ゲンダレを咲かし続けよう！」と。

実際、『ヂングレ』に最初集まったのはほとんど素人で、詩作の実績をもっていたのは金時鐘と権敬沢の二人だけであったという。創刊号の「編集後記」に金時鐘が「この詩誌ほどの新米の集まりも珍しいだろう」と書くほどであった。多くは日本語による詩作であったが、一部、金時鐘も含めて朝鮮語で書かれたものもある。なお植民地時代を含めて教育の機会にめぐまれなかった在日朝鮮女性の場合、李錦玉が『民主朝鮮』に寄稿したのにつづいて、李静子など少なからぬ女性の書き手が『ヂングレ』で活躍したことを忘れてはならないだろう⁽³⁸⁾。

『ヂングレ』が詩誌として高い水準を達成するのは、ようやく第13号(1955年9月)以後のことであるとされる。しかしその時期は、民戦に代わって共和国・金日成を仰ぎ見る朝鮮総連が結成(1955年5月)されたのと重なり、『ヂングレ』そのものが総連の執拗な攻撃にさらされていく。在日朝鮮人運動の「路線転換」による総連結成が在日同胞に劇的な影響を与えていくのであるが、文化・芸術方面でも「祖国」志向を強要していく。詩作という面でみれば、「朝鮮人は朝鮮語で祖国を歌うべきである」との方針が出され、『ヂングレ』から会員たちが急速に離れていく。『ヂングレ』に梁石日が加わったのは1956年5月発行の第15号からであるが、その時には『ヂングレ』は皮肉にも「少数精鋭の同人誌」に変化していく時期であり、やがて廃刊を余儀なくされていく⁽³⁹⁾。

その間、金時鐘は言いしれぬ思想的葛藤を経験する。共和国・金日成を信じていたが故に、金時鐘の心情はその分大きく揺れ動く。『ヂングレ』をひもといてみると、1953年9月発行の第4号に、「南朝鮮労働党(南労党)」の責任者であった朴憲永が処刑される少し前に、「米帝のスパイ」「反党反革命分子」として南労党系の李承燁・林和らが処断されたことに対して、全面的に支持するアピールを載せている。「叛徒の名のつくすべては抹殺される」と題して「平壤市特別軍事法廷が李承燁・林和一味に下した処断をわたしたちは全面的に支持する。……わたしたちは斗いの中でのみ、詩が生れる事を認め合った。本当に祖国を愛し、民族を知り得たとき詩は生まれる」と。この「大阪朝鮮人詩人集団声明」に対して、例えば、祖防委機関紙『新朝鮮(새조선)』(西日本版)では、「大阪の文化人たちはこぞってこの声明を支持し、文化芸術協会もこれを取りあげて会議を開いている」と、大きく宣伝している(1953年9月16日)。金時鐘は詩人ではあっても、「活動家」として『ヂングレ』に少なからず「プロパガンダ詩」を書いたことを後に告白している⁽⁴⁰⁾。

しかしやがて金時鐘は、そうした総連・共和国に反旗をひるがえし始める。すでに別の稿で書いたことがあるが⁽⁴¹⁾、『ヂングレ』第18号(1957年7月)に「大阪総連」という批判詩を載せ、同時掲載の評論「盲と蛇の押問答」で詩作の原点を踏まえて論陣を張る。「私は日本語で詩を書いていることについて、久しく疑問を強いられてきました」としながら、しかし朝鮮語で「愛国詩」を書くことを強要されても、それは「在日という副詞をもった朝鮮人」である自分には「無感覚以上の嫌悪」であると一蹴する。例えば、／栄光を捧げます／新年の栄光を／祖国の旗であり勝利であらせられる／われらの首領の前に！／、といったウソの詩ないしは必要以上にみじめな詩、は、読みたくないし、書けない、と。一つの政治体制を賛美する言葉のあり方は、詩人からすれば「意識の定型化」でしかない峻拒したのである。こうして、金時鐘は、総連からは「共和国公民」であることに異を唱える「思想悪のサンプル」として、以後、総連組織の猛烈な攻撃にさらされていく。『ヂングレ』同人の鄭仁の言葉を借りるなら、それだけ「共和国公民の矜持という抽象は、いささかやっかいなシロモノ」⁽⁴²⁾だったのである。

こうして政治批判にさらされた『ヂングレ』は第20号で解散することになり、その約一年後の1959年6月に後継誌として『カリオン』が創刊されるが、それも3号で終わってしまう。時期的には1959年12月、北への帰国船が始まったときに重なる。

多忙と累積疲労による心筋症および闘病。その中であってかろうじて第一詩集『地平線』(ヂングレ発行所、1955年)を出版するが、幸いにもこの処女詩集は1週間とたたぬうちに売り切れ、詩人としてのデビューをはたす。『地平線』の「自序」はつぎのように詠われている。／自分だけの 朝を／お

まえは 欲してはならない。／照るところがあればくもるところがあるものだ。／崩れ去らぬ 地球の廻転をこそ／おまえは 信じていればいい。／……／行きつけないところに 地平があるのではない。／おまえの立っている その地点が地平だ。／……。

もうひとつ紹介しておくなら、「在日朝鮮人」という詩がある。／今日も挙げられた 朝鮮人／やみ煙草つくりの 朝鮮人。／昨日も押さえられた 朝鮮人／ドブロク造りの 朝鮮人。／今日も掘つてる 朝鮮人／鉄屑ほりの 朝鮮人／……／働くとこない 朝鮮人。／使ってくれない 朝鮮人。／子供をよく生む 朝鮮人。／もっともよく食う 朝鮮人。／……。

まさに「在日を生きる」ことを宣言する詩集であり、在日同胞から喝采を受けることになる。しかしもとより駆け出しの詩人である金時鐘には多くの期待とともに、批評・批判が寄せられることになる。『デンダレ』第15号（1956年5月）に載った洪允杓「流民の記憶について—詩集「地平線」の読後感より」と村井平七「金時鐘詩集「地平線」評—許南麒を克服していない金時鐘とその周辺について」はその例である。ともに当時詩人としては名の知られている許南麒を引き合いに出しつつ、金時鐘を論じている。

洪允杓、曰く。「『地平線』で金時鐘は、その詩の素材を祖国の統一独立を念願する在日朝鮮人の闘いの場へ求めている。それは許南麒が在日朝鮮人の現実の場を素通りして、詩の素材を直接祖国に求めたのに反し、金時鐘が自身のたっている現実を見極めようとしながら、許南麒を乗り越えようとする意欲と姿勢であり、私が共感を感じずるのもこの問題の提起の仕方にてである。しかし金時鐘は自身をそのように位置づけながら、尚詩の今日的な課題の程遠い地点でしか、私に問題を提出してくれなかった。詩の方法に於いて、金時鐘は社会主義リアリズムを指向しながらも、詩集「地平線」でその作品群の底に流れているのは流民の記憶から脱しきれない詩人の感性であった。……金時鐘はその内部に流民的な抒情をいだいたまま、現代詩的な視野に立ち入ろうとしている。したがってそこからは、私たちが在日朝鮮人の詩の書き手たちや詩の読者が最も知りたい自己変革のプロセスをみせてくれない。……ただここから脱し得る道は熾烈なまでの自己内部斗争だけがわれわれに新しい未来の展望を約束してくれるのである」と。村井平七も同じように、金時鐘は許南麒と画然と区別されるべき立場にあるにもかかわらず、本質的にはまだ、金時鐘と許南麒を区別する位置には至っていない、と論じている。

詩作に悩み、生活に貧窮し、そして政治批判に耐えての日々、金時鐘はいつしか連日のように暴飲に走ったりもする。しかしそれでも、1956年11月には『デンダレ』の会員であった姜順喜と結婚。ケーキとコーヒーだけの簡素な式であったというが、仲間の温かい祝福に囲まれての出発であった。翌年には第二詩集『日本風土記』（国文社）を出す。ご多分に漏れず、その後マージャン屋、中華料理屋、靴の行商、東洋漢方薬の販売、居酒屋など、生活の糧を得るのに夫婦で四苦八苦する。金時鐘にとって「北へ帰ることが日本へ脱出してきた私のせめてもの希望だったんだけど、五〇年代から六〇年代初頭までには金日成の虚像は分かってきた。でも一方で、北はものすごく絶対正義の国ではあったんですよ、僕の場合。社会主義をまだ信じてましたしね」⁽⁴³⁾と語っている。

そのなかにあって、金時鐘は、総連との対決、というよりは、もっと大きく言えば、分断時代を生きる在日朝鮮人として、新たな困難に立ち向かっていくことになる。許南麒批判の意味を込めて書いた「第二世文学論—若き朝鮮詩人の痛み」（『現代詩』5巻6号、新日本文学会、1958年6月）はその出発点ではなかったかと思う。少し長くなるが、そのまま引用しておきたい。「祖国が二分されているという苦痛もさることながら、海の向こうに存在している祖国が、余りにも勞せずして私たちが在日同胞と結びついている状態、厳密にいうならそう思いこまれている状態が“不安”なのだ。その懐疑のないこと、まるで白痴的な健康さである。少なくとも“流民”という谷間で生れ育った私たち若い世代、「祖国」は父母を介してしかまさがることができず、その「色」も「臭い」も「響き」もしなびた垢まみれの「父母」を通してしか感じえない習性をもってしまった私たちにとって、こうも谷間の世代を素通りして

“祖国”と結びつかされてしまっは、私たちはいつまでも海のこちらの祖国の落し児でしかないだろう。私たちはこうして手探りの論理を身につけてしまった。はっきりいって亡命者の論理についてゆけないのだ。自己の寄って立っているこの基ばんから、この手でまさぐりうるものだけが頼りだ」と。

ここでひとつだけ書き加えておくと、詩人・金時鐘がつねに「短歌的抒情の否定」を心掛けてきたことの意味である。さきにしたが、金時鐘は皇民化教育を受ける過程で、近代日本の叙情詩とか、唱歌、童歌などは人間をきれいにするものだと思ってきたが、解放後になってみると、それらは実際には、大きくみると人を損ねることに力を貸すものであったと悟る。そこから日本に来た金時鐘は、日本でいう抒情というものに背を向けるようになり、また支配語であった日本語に違和感を持ちつづける。解放後もなお思考と感情を規制するコードとなって自らの内に住み着いている日本語、にもかかわらず日本語で書くことを余儀なくされる事態にどう対峙しうるのか。そうした煩悶のなかで金時鐘が出会ったのは、偶然にも小野十三郎の『詩論』（真善美社、1947年）であった。そこで学んだ金時鐘が選び取ったのが「短歌的抒情の否定」という方法である。

『リズムと抒情の詩学—金時鐘と「短歌的抒情の否定」』（生活書院、2010年）を著した呉世宗によれば、金時鐘がいう「短歌的抒情の否定」が目ざすのは、日本語による詩作を通じて言語を内側から変質させることによって「短歌的抒情」を解体し、それにより反叙情的な抒情としての「まみれても垢じまない抒情」を創出することであるという。ここで「垢じまない抒情」とは、短歌的抒情とは異なり、自己と世界を変革することで、その断絶を繋いでいく働きをもつものだという。日本語についていうなら、金時鐘は、日本語を身体化した自らの解放のためにも、日本語を実体化し批判するのではなく、その内側で起こっていることを理解し、内破する必要があるためであろう、という。難しい命題で、私自身はそのすべてを理解できるわけではないが、ここから金時鐘は新たに、困難な時代に立ち向かっていったものと思われる。

それにしても、在日朝鮮人の文学を論じる場合、植民地時代の張赫宙や金史良、解放後の金達寿、許南麒、そして金石範や金時鐘など、おしなべて朝鮮語で書くべきか、あるいは日本語で書くのか、といった問題がつきまとう。しかしこれについてはまた別の稿で論じることとし、ここではただ、日本語で書くことが、在日朝鮮人の歴史性や存在性を損なうことになるのかと考えるのは間違いである、ということだけを述べておきたい。いずれにしろ、この稿では、植民地時代と解放後の在日朝鮮人の文学について、張赫宙、金史良、金達寿、許南麒、そして立原正秋、さらに金石範や金時鐘などに絞って、民族をめぐる葛藤を中心にその大枠を提示したいと思っただけである。

〈注〉

- (1) 明治学院同窓会誌『白金學報』第9号。
- (2) 磯貝治良「第一世代の文学略図」（『季刊青丘』第19号、1994年2月）。
- (3) 梶井陟「日本の中の朝鮮文学」（『朝鮮文学—紹介と研究』朝鮮文学の会、季刊第12号（終刊号）、1974年8月）。
- (4) 田村栄章「1935年張赫宙の思想的転換点」（『日本文化学報』第15輯、2002年11月）。
- (5) 高榮蘭『「戦後」というイデオロギー—歴史・記憶・文化』藤原書店、2010年。
- (6) 金達寿「金史良と私」（『朝鮮人』No.24、朝鮮人社、1986年6月）。
- (7) 横手一彦「解説・〈史〉の内側を語る言葉」（磯貝治良・黒古一夫編『〈在日〉文学全集 第11巻 金史良・張赫宙・高史明』勉誠出版、2006年）。
- (8) 大村益夫『朝鮮近代文学と日本』緑蔭書房、2003年。
- (9) 朝鮮問題研究会編『海峡』2、社会評論社、1975年7月。
- (10) 李殷直『朝鮮の夜明けを求めて 第5部』明石書店、1997年。

- (11) 『金史良全集』Ⅳ，河出書房新社，1973年，所収。
- (12) 上に同じ。
- (13) 『みずからの文化を創りだす—梁民基記録集』梁民基記録集編集委員会，2012年。
- (14) 『東風通信』第1号，東風社，1966年4月10日。
- (15) 『民主朝鮮』第19号，1948年4月。
- (16) 水野明善「在日朝鮮人作家論おぼえがき（その一）」（『民主朝鮮』第33号，1950年7月）。
- (17) 磯貝治良・黒古一夫編『〈在日〉文学全集』第1巻・金達寿，勉誠出版，2006年。
- (18) 金石範『金石範《火山島》小説世界を語る！』右文書院，2010年。
- (19) 朴鐘鳴「〔解説1〕『民主朝鮮』概観」（復刻『民主朝鮮』本誌別巻，明石書店，1993年）。
- (20) 崔孝先『海峡に立つ人—金達寿の文学と生涯』批評社，1998年。
- (21) 梁石日『修羅を生きる』幻冬舎アウトロー文庫，1999年。
- (22) 尹学準「金達寿著『朝鮮』—民族・歴史・文化—ゆがめられたイメージとどう対決するかの問題について」（『学之光』第4号，法政大学朝鮮文化研究会・朝鮮留学生同窓会，1958年11月）。
- (23) 呉世宗「許南麒の日本語詩についての一考察」（『論潮』第6号，論調の会，2014年1月）。
- (24) 梁石日「金史良試論」（『原点』1，梁石日個人雑誌，1967年）。
- (25) 金慶海編『在日朝鮮人民族教育擁護闘争資料集Ⅰ』明石書店，1988年，所収。
- (26) 「座談会・在日文学と日本文学をめぐって」（『在日文芸民涛』第4号，1988年9月）。
- (27) 姜魏堂『ある帰化朝鮮人の記録』同成社，1973年。
- (28) 姜魏堂「朝連の思い出」（『民主朝鮮』第32号，1950年5月）。
- (29) 『〈在日〉文学全集』第16巻・作品集Ⅱ，勉誠出版，2006年。
- (30) 金貞恵「立原正秋の美意識と小説的形象」（『日本語文学』第35輯，2006年11月）。
- (31) 四方田犬彦『日本のマラーノ文学』人文書院，2007年。
- (32) 『〈在日〉文学全集』第3巻・金石範，勉誠出版，2006年。
- (33) 『金石範作品集Ⅰ』平凡社，2005年，所収。
- (34) 金石範・金時鐘著，文京洙編『なぜ書きつづけてきたか なぜ沈黙してきたか』平凡社，2001年。
- (35) 上に同じ。
- (36) 『〈在日〉文学全集』第5巻・金時鐘，勉誠出版，2006年。
- (37) 金時鐘「日本精神修養時代」（『図書』2014年4月号）。
- (38) 金恵媛編『在日朝鮮女性作品集1945-84 2』在日朝鮮人資料叢書9，緑蔭書房，2014年。
- (39) 宇野田尚哉「『ヂンダレ』『カリオン』『原点』『黄海』解説」（復刻版『ヂンダレ・カリオン』別冊，不二出版，2008年，所収）。
- (40) 『論潮』第6号，論調の会，2014年1月。
- (41) 尹健次「民戦から朝鮮総連へ—路線転換の歩み」（『在日朝鮮人史研究』第43号，2013年10月）。
- (42) 鄭仁「一年の集約」（『ヂンダレ』第18号，1957年7月）。
- (43) 注（40）に同じ。